

古代史を解明する会

第38回

## 質疑応答・意見交換会

「文献と考古資料の対応：天孫降臨・日向三代」

2024年2月10日

丸地三郎

## テーマ： 質疑応答・意見交換会 「文献と考古資料の対応：天孫降臨・日向三代」 について

- 2023年の10月以来、
  - 34.「天孫降臨と史実の関係」
  - 35.「邪馬台国と高天原の関係」
  - 36.「日向三代の記述の理由」
  - 37.「文献と考古資料の対応：天孫降臨・日向三代」
- と連続して、古事記・日本書紀に記載された天孫降臨・日向三代につき記紀解釈・史実・考古資料について発表と討論を行って来ました。
- 前は「文献と考古資料の対応」と云うことで、発表が有りましたが、時間が取れず、質疑応答も行いませんでした。
- そこで、今回は「質疑応答・意見交換会」を行うこととしました。
  - 記紀の解釈と考古資料・中国歴史書と対応するという新しい試みを行っておりますので、従来の解釈や考古学の説とも違う点が出てきてます。
  - どこが違うのか？ 何が違うのか？ 整合性がとるには？ など、検討が必要かと思えます。
- 既に、何人か、質疑・意見が出ています。
  - 当日の質問・意見も含めて、活発な質疑応答・意見交換を行えば面白いと思えます。
  - 勿論、聴く側に徹しても構いません。
  - 皆様の積極的な参加をお待ち申し上げます。
- 尚、古代史ネットのHPに、前回までの資料と動画が掲載されておりますので、ご覧頂けると幸いです。
- 下記のURLをクリックすると、34.「天孫降臨と史実の関係」に直接入ります。
- [https://nihonkodaishi.net/info-research/research\\_bn06.html#kaimei2023oct](https://nihonkodaishi.net/info-research/research_bn06.html#kaimei2023oct)

# 日向三代:記紀の記述

## • 日向三代の神話

✓ 天孫降臨で、

前  
段

- 天兒屋命など主要な人物を付け、三種の神器などを持ち、武装した人を伴う。
- 筑紫の日向の国に降り、吾田の長屋の笠狭碕に立つ
- 猿田毘古神と天宇受売命の挿話

- 
- **邇邇藝命**と木花之佐久夜毘売の結婚(石長比売の挿話)
    - 笠狭の御前で、木花之佐久夜毘売(神阿多都比売)と会う
    - 醜い姉(石長比売)を追い返し、長寿では無くなる、
    - 火の産屋の出産 (海幸彦/山幸彦の誕生)
  - 海幸彦/山幸彦の兄弟争い
    - 海・山の狩猟用の得物の交換 : 山幸彦が釣り針を紛失
    - 弟・**火遠理命** : 海神の宮訪問・海神の娘 = 豊玉姫と結婚
    - 潮満珠・潮乾珠/海幸彦 = 火照命の服従、
  - **鵜葺草葺不合命**の誕生
    - 豊玉姫:生む時の鰐の姿を見られ海へ帰る
    - 海神の妹 = 玉依姫が乳母として来る
    - 鵜葺草葺不合命が玉依姫と結婚

後  
段

- 
- ✓ 五瀬・稻飯命・三毛野命・神倭伊波毘古命(神武天皇)の誕生
    - 神武東征へ

# 天孫降臨と日向三代の登場人物

- 高天原の主:天照大神  
天の岩戸事件で須佐之男命を追放
- 高天原を引き継いだ  
天忍穗耳命

-----日向三代-----

- 高天原から降臨した  
邇邇芸命  
(ニニギノミコト)

- 火遠理命  
(ホオリノミコト)

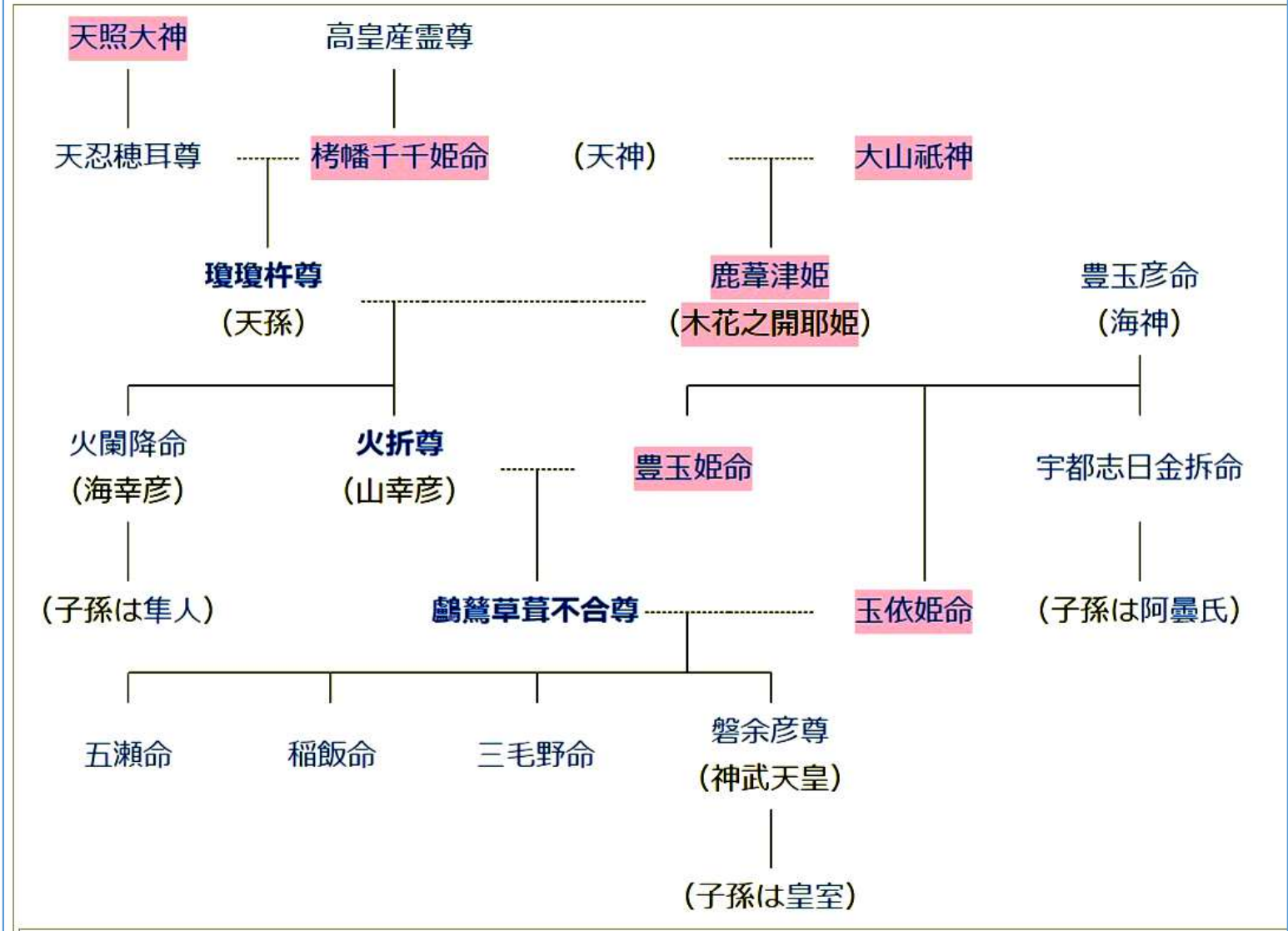
- 鵜草葺不合命  
(ウガヤフキアエズノミコト)

- 神武東征に参加した

五瀬命  
 稲飯命  
 三毛入野命  
 伊波礼毘古命(神武天皇)

右図は Wikipedia より

系図 [編集]





紀卷第廿五

天萬豊日天皇

孝徳天皇

天萬豊日天皇天豊財重日

# 日本書紀

(法)

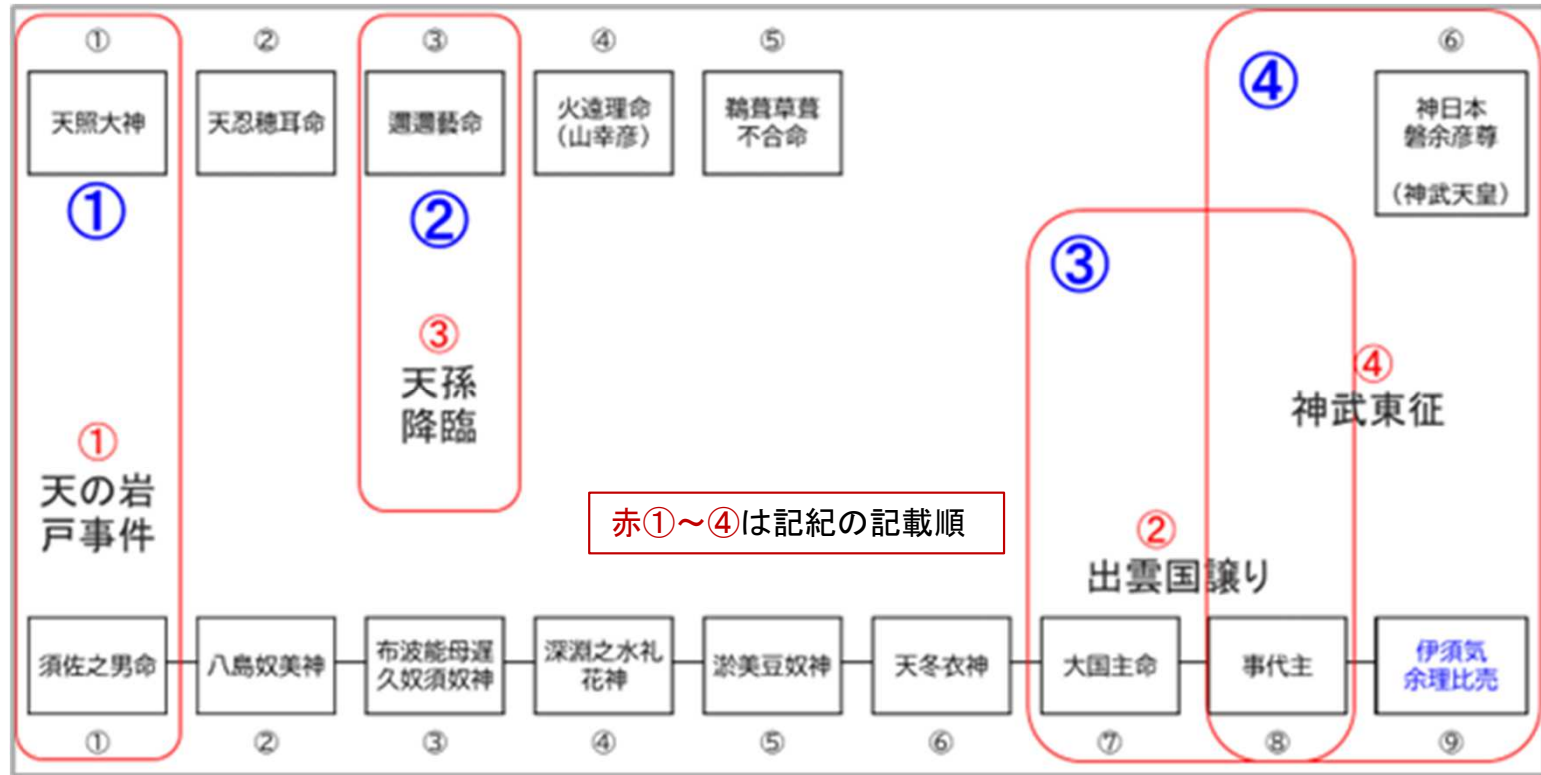
坂本太郎・家永三郎  
井上光貞・大野晋 校注

豊財重日足姬天皇四年六月庚戌  
豊財重日足姬天皇恩欲傳位於中

黄4-1  
岩波文庫

# 天孫降臨・日向三代の歴史的解釈

- 岩波書店の「日本書紀」の注に記載された「天の岩戸の説話の次に、この天孫降臨の話が続いていたもの」との指摘により、古事記・日本書紀の記述の解釈は大きく変わる。
  - 具体的に考えられる状況に至る。



- そこで、天の岩戸・天孫降臨・日向三代の解釈を試みる。

# 日向三代の解釈と問題点 ①

## ● 邇邇藝命と木花之佐久夜毘売の結婚

- 笠狭の御前で、木花之佐久夜毘売(神阿多都比売)と出会う。
- 親の大山津見神は大喜びで、姉を添え、祝いの品物と一緒に、娘達を送り出した。
  - 醜い姉(石長比売)を追い返えされた。長寿では無くなるとのやりとりがあった。
- 一晩で妊娠したのはおかしいと云われ、火の産屋の出産。
- この話を歴史としてどう読むか？
  - 木花之佐久夜毘売の話：一夜で妊娠した。これを邇邇芸命達は疑った。
  - このような事態は、婚姻自体に、何も問題が無ければ、起きない事態。
  - 一晩寝て、翌日からは離れ離れに暮らしたことになる。
  - 又、邇邇芸命との一晩の性交で妊娠は有り得ないとの疑いを晴らす必要があった。
- 木花之佐久夜毘売の父：大山津見神は、石長比売の件で怒り狂い、一晩で木花之佐久夜毘売を連れ戻した。
  - それっきり、絶縁状態を保った。
  - 邇邇芸命の側も、すっかり忘れる/冷えた状態になった。→在の部族との諍いを象徴。
  - しばらくして、木花之佐久夜毘売の妊娠が発覚し、出産・認知の問題が発生した。
    - このような状態が有って、初めて、『一晩寝て、翌日からは離れ離れに暮らした』ことになる。
- 火の産屋の出産
  - 神話では、産屋に火を放つて燃え盛る時に出産したことになる。
    - これは「お伽噺」ですが、ベースとなる事象として、東南アジアや奄美地方にも残る風習で、出産直後に体温が下がり健康上の問題発生を避けるため、産屋内で火を焚くことがあり、夏でも、火を焚く。
    - 男共には、火を焚くことは、奇妙な風習に思えるので、産屋の中で火を焚いたことを、殊更に強調して、「お伽噺」を作り上げたものと推察する。
- この話のストーリー展開は、合間、合間に、現実ではない「お伽噺」が入っているが、事件を推測できる事象がしっかりと、書き込まれている。

# 日向三代の解釈と問題点 ②

## ● 海幸彦/山幸彦の兄弟の争い

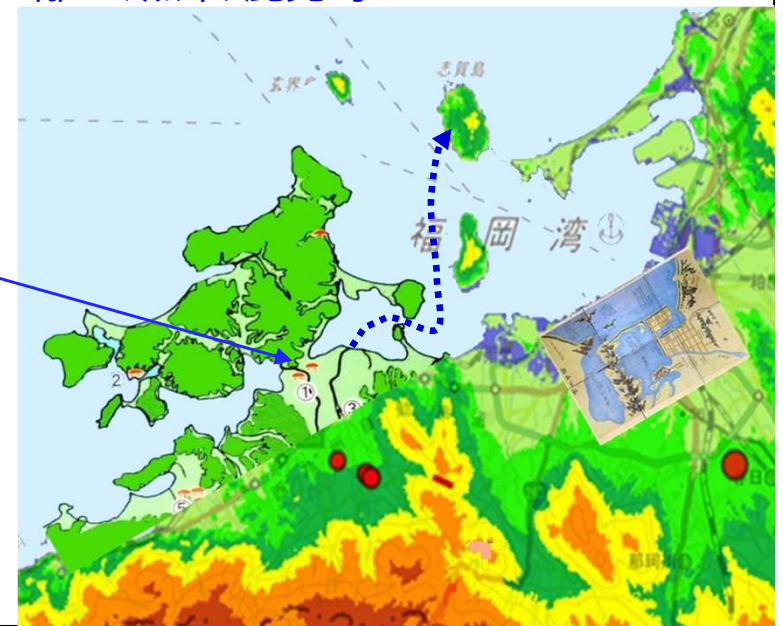
- 海・山の狩猟用の得物の交換 : 山幸彦(弟)が釣り針を紛失し、トラブルとなる。
- 山幸彦:火遠理命 : 海神の宮訪問・海神の娘=豊玉姫と結婚
- 潮満珠・潮乾珠を得て、海幸彦=火照命が服従。

## ● この話を歴史としてどう読むか？

- 執拗な返却要求は、深刻な兄弟の争いが見て取れる。
  - 邇邇芸命の後を継ぐべき兄弟の争いは、王位継承争いと見られる。
- 海中の竜宮城へ行ったような記述だが、執拗な返却要求に困った弟が、逃げ出し、海人族の島/地域へ行き、その首長の娘と結婚し、海人族の支援を受けて、故郷に戻ったと考える。
- 潮満珠・潮乾珠は「お伽噺」の道具で、実際は、海人族が、武力・政治力を使い、兄・海幸彦を追い込み、弟が王位継承争いに勝ったことを意味する。
- 山幸彦:火遠理命が王位継承。
- 兄・海幸彦は、隼人の祖先になったとされることから、故郷(日向)を離れ、熊本/鹿児島へ

## ● 日向の地を糸島・前原地区とすると、

- 到着地は、古糸島半島の付け根部分
- 海人族の島は志賀の島。安曇族と推定する。





# 天の岩戸/天孫降臨/日向三代 の解釈:まとめ

- 天孫一族は、天照大神まで、天之御中主から12代続く家系の主要な物語が、ここから始まることは、天照大神が、歴史上に残る偉大な「王」であったことを示す。
- その天照大神が、同族の須佐之男命の一族と対立し、
  - 高天原に居た天照大神が、須佐之男命に攻められた。
  - 「誓約」により、停戦・休戦が行われたが、須佐之男命が「狼藉」=戦争を再び仕掛け、高天原は敗戦し、天照大神は逃避した。
  - 遠隔地にいた天孫一族が援軍となり、高天原を取り戻し、逃避していた天照大神が救出された。
  - 須佐之男命は、罰を受け、遠方に追放された。
- 高天原は繁栄し、天照大神の世代から天忍穗耳命の世代に代わった。
  - 須佐之男命が追放されて20-30年後、再び、須佐之男命の子孫=出雲一族が台頭し、高天原を脅かした。
  - 出雲一族の勢力に押された天忍穗耳命は、厳しい選択をせざる得なかった。
    - 長男の天火明命を出雲族側に送った。(政略結婚/人質として差し出したか?)
    - 次男の邇邇芸命に王権を譲り(三種の神器を渡し)、多くの重臣や、刀鍛冶や鉄・鏡・玉作の生産者、主な武将を添えて、乃ち、ほぼ一国を構成する人員を帯同して、新天地へ移動させた。
  - 新天地に移動した邇邇芸命は、出雲一族の勢力に負けず、新しい国を作り、配偶者を得て、子孫を残した。
    - 配偶者については、その親と争いが発生したり、次の王位継承争いでは、兄弟喧嘩が発生するなどトピックスには事欠かなかったが、海人族の協力を勝ち得て、三代の間に、出雲一族と対抗し、滅ぼす勢力を得たと推定する。
- 出雲一族との争いは、厳しいものが有り、使者を出す/人質を出すなどの戦略を必要とした。
  - その後、記紀には記載がないが、出雲一族との勢力バランスが大きく変わり、天孫一族が有利となった。そして、出雲の国譲りが実行された。一見、平和裏に行われたようだが、長野県の諏訪まで、建御名方神を追い、命乞いをさせたことは、武力に訴えたものと推定する。(この項は、今回のテーマの範囲を逸脱)
  - 出雲一族は「国譲り」を了承し、実行したが、大和など主要地域は、饒速日命が、勝手に占拠した。
- 天孫一族は、出雲国譲りに成功し、実際に領土・支配するため、大和に移動しようとしたが、饒速日命の反乱が起き、神武東征の軍勢を出すことになった。

# 天の岩戸/天孫降臨/日向三代 の解釈: 「検証方法」

## • 記紀の解釈を検証する

- 年代は不明。天孫族の地域も、高天原の位置も、須佐之男命:出雲族の地域(九州での)も不明。
- 実際に有ったことならば、遺跡・遺物・伝承などが残るはずだが、検証方法も不明。
- 考古学成果の発表には、個々のものが多く、全体を俯瞰したものが少なく、見晴らしがきかないのが残念。
- 記紀神話をベースにして、考古資料等から歴史として解析した研究を探したが、納得できるものは残念ながら見た記憶が無い。それでは、やってみるしかない。

## • 検証の方法

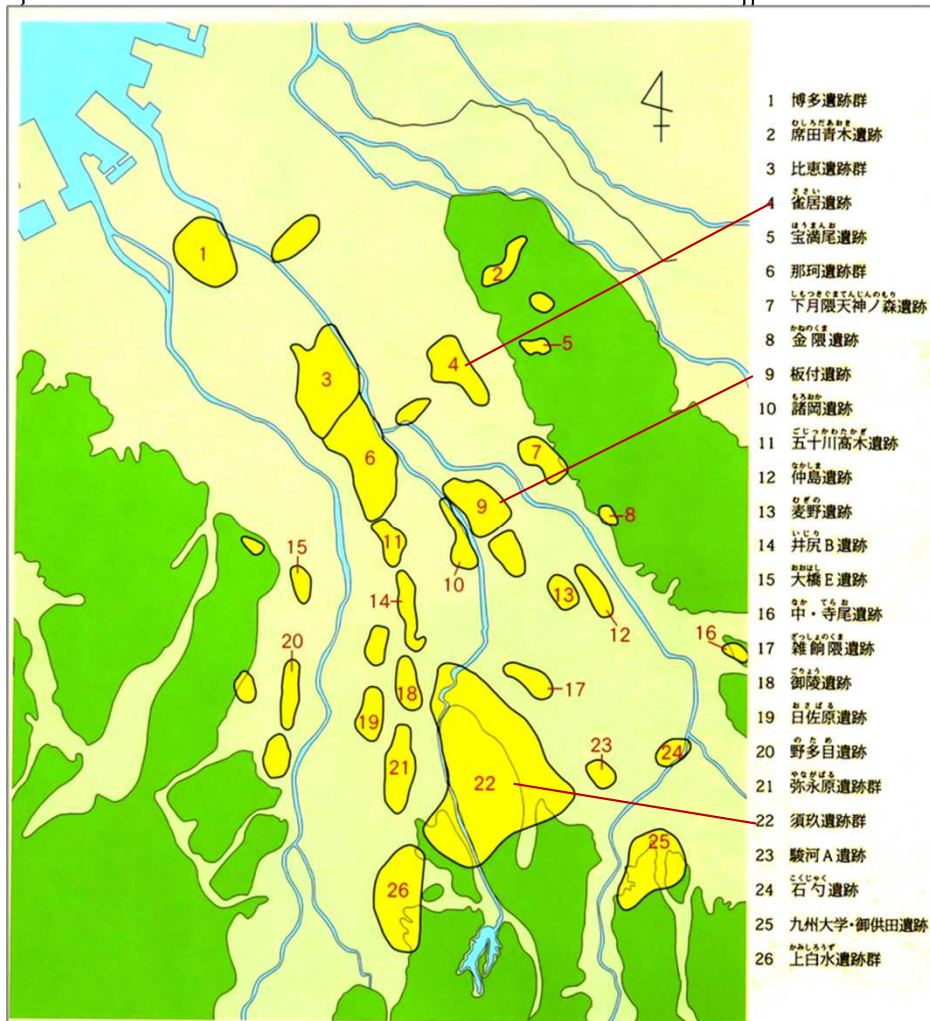
- 王が居たならば、王墓があるはず。
  - 弥生時代の王墓から、時代・地理:場所が判るかも。
  - 中国の史書に記載された王は、記紀に記載された可能性がある。時代が特定可能。
  - 天孫族と須佐之男命/出雲族の区別をつける必要がある。三種の神器が一つの材料。
- 戦争が行われたことは、明確。
  - 戦争の証拠は、戦傷遺跡、高地性集落(山城)、環濠などから。
  - 青銅の祭器とその埋納は、勢力範囲の推定と戦争の証拠となり得る。
- 二つの勢力が争ったならば、生活の基盤の違い、土器の違いが有るはず。
  - 土器の分布や集落・技術の違いが有れば、それは補完材料となる。
- もう一つの検証材料は、魏志倭人伝
  - 倭国大乱の記述有り。
  - 卑弥呼擁立。
  - 大倭を置き、女王國以北を監視・一大率を伊都国に置き諸国を檢察する。諸國は畏憚する。
  - 日本の歴史では有り得ない奇妙な一夫多妻の記述がある。
  - 狗奴国

# 考古資料の記述から ①

福岡市博物館  
企画展示 2010年度  
『**奴国**発展の礎 -クニグニがまだ  
小さかった頃-』  
展示記録から文章を抜粋  
図・地図は別途追加

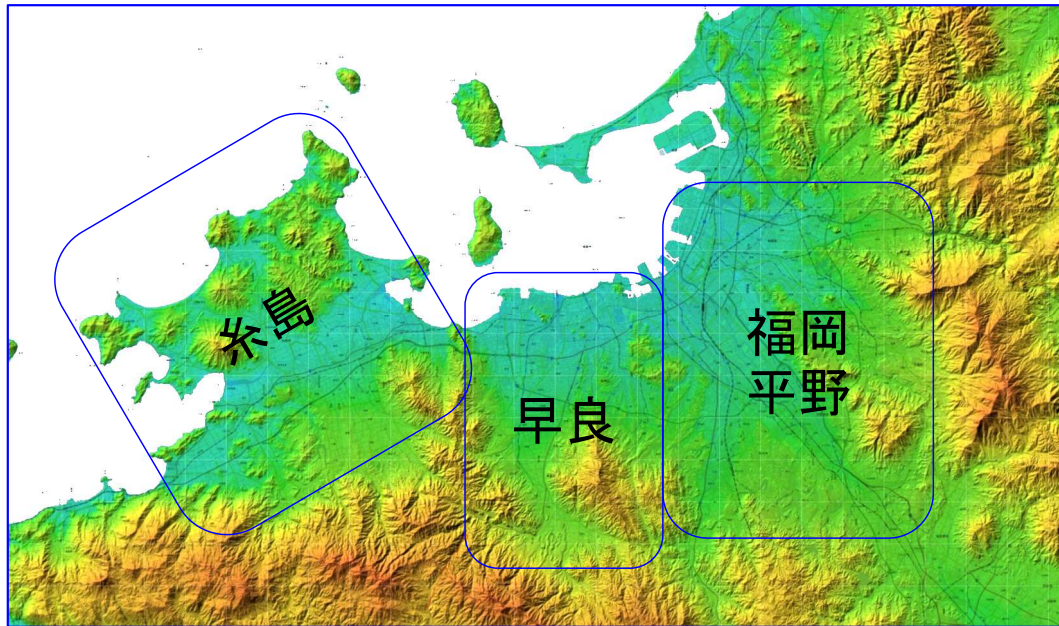
## 弥生時代の始まりと奴国の始まり

- 後に奴国となる範囲に最初の弥生的な集落として出現したのは、**板付遺跡**や**雀居遺跡**(ささいいせき)など、**那珂川・御笠川**中流域の低い台地の上につくられた集落でした。
- 板付遺跡には、弥生時代の早い段階ですでに環濠や貯蔵穴、人工的な畦(あぜ)や水路を備えた水田など、その後の弥生集落に見られる諸要素がそろっていました。
- 板付遺跡の付近には諸岡遺跡など**弥生時代前期**の集落があり、この地域に小規模な「ムラ」(数軒の住居が集まった集落)が散在していたことがわかっています。
- 土器のような日常用具にとどまらず、当時の埋葬方法にも見られます。土壙墓(どこうぼ)や埋甕(うめがめ)といった縄文時代からの埋葬方法に加え、この時代には朝鮮半島から支石墓(しせきぼ)や石棺墓(せっかんぼ)という新たな埋葬方法が伝わります。
- やがて、甕棺墓(かめかんぼ)が北部九州で独自に発達したこともあり、同じ時代に営まれた墓地の中に様々な形式の墓が並ぶといった状況も見られました。
- 弥生時代前期の後半**になると**奄美**や**沖縄**といった南西諸島産の貝を使用した**貝輪**が北部九州で見られるようになり、**山陰**や**北陸**の**ヒスイ**を使った**玉製品**がもたらされるというように離れた地域の文化が入ってくる。



- 考古学の論文を読むが、読み切れない。博物館の展示などの記述は、地域全体を判り易く記述している。考古学者の節が根拠になっているはずで、素人には、有難い。

## 考古資料の記述から ②



### 早良 吉武高木遺跡の時代

- 弥生時代前期末から中期初頭の北部九州の文化が流動的になったことが、この時期の土器型式からみてとれます。
- 城ノ越式土器 (じょうのこしきどき) という土器型式は、前期の板付式、中期の須玖式 (すぐしき) という長期にわたって安定して存在した土器型式の間において、非常に短期間しか継続しなかった型式です。
- この土器型式が長く続かなかったことは、その土器を製作していた集落や家族の構造がこの時期に急激に変わってしまったことを物語ります。

### 吉武高木遺跡3号木棺墓の遺物出土状況

- この弥生時代前期末から中期初頭の時期に玄界灘沿岸で勢力を持っていたのが早良平野の吉武高木遺跡の被葬者たちでした。
- 吉武高木遺跡3号木棺墓の被葬者は銅剣・銅戈・銅矛の青銅武器、ヒスイ勾玉、そして碧玉製管玉を持ち、近接する他の墓からも武器をはじめとする副葬品が多数出土しました。
- 早良平野のそれぞれのムラは、吉武高木のムラと結びつきながらゆるやかな関係を保っていたのでしょう。
- 早良平野のムラは、次の時代になると奴国のムラに比べ相対的にその力を落としていきます。

# 考古資料の記述から ④ 考古資料から歴史把握が可能

福岡市博物館 企画展示 2010年度  
『奴国発展の礎 -クニグニがまだ小さかった頃-』  
展示記録から

		早良平野	福岡平野(奴国)
弥生前期	前半		板付遺跡や雀居遺跡 水田・環濠集落 小規模なムラ
	後半		沖縄・奄美から貝輪 山陰・北陸からヒスイ 板付け式土器
弥生前期末から 中期初頭		吉武高木遺跡3号墓	
		銅剣・勾玉の副葬	
		極短期間の間だけ「城ノ越式土器」	
弥生中期	前半	須玖式 土器	
		吉武高木のムラが全盛期を迎えた	比恵・那珂遺跡 大変化あり。 都市計画大溝
	後半以降	ガラス・青銅製鋳物など新文化・技術	
			須玖岡本遺跡 広範囲でまとまり 奴国の中心に 甕棺墓銅鏡30面:王墓 中国の漢に朝献し、金印を手にした。

福岡市博物館の展示記録を読み、左図のような時期/地域毎の状況をまとめることが出来る。

- 弥生前期
  - 福岡平野に奴国が有り、弥生時代前期から水田稲作を始め、発展し、前期の後半には、南海や北陸から装飾品を輸入する余裕が出るほど、発展した。
- 早良平野には、王墓が生まれた。
- 弥生中期前半
  - 吉武高木遺跡が全盛期を迎え、
- 弥生中期後半
  - ガラス・青銅器鋳物を生産。
  - 早良から奴国へ勢力の中心が移る。
  - 須玖岡本遺跡、広範囲にまとまり奴国の中心地となる。
  - 須玖岡本の甕棺墓は王墓
  - 中国に朝献
- 異変 →これが何を意味するのだろうか？
  - 土器が板付け式から須玖式に移る間の時期に、短期間だけ別の形式になる。
  - 須玖岡本の北側の比恵・那珂遺跡に大変化が有り、都市計画が実施された。

# 王墓 ① 早良平野

- 早良平野の吉武高木遺跡で最古の王墓 [福岡市博物館のHPより](#)
  - 吉武高木遺跡では弥生時代前期末～中期後半の**甕棺墓34基**、木棺墓4基、土壌墓13基が発見されました。
  - 成人の墓には標石をもつものもあります。
  - ここからは甕棺墓8基と木棺墓4基から**細形銅剣9口**、細形銅戈1口、細形銅矛1口、**多鈕細文鏡1面**、銅釧(どうくしろ)2個、ヒスイ製の勾玉、碧玉製の管玉などが出土しました。
  - 特に、3号木棺墓には**細形銅剣2口**、細形銅矛1口、細形銅戈1口、**多鈕細文鏡1面**、**ヒスイ製勾玉**、碧玉製管玉類が納められ、この墓地の中心的な墓と考えられています。



# 王墓 ② 福岡平野 須玖岡本の王墓



王墓の復元模型



連弧文「清白」鏡

王墓に副葬されていた前漢鏡の中には中型品、小型品も含まれていた。径18.5cm。



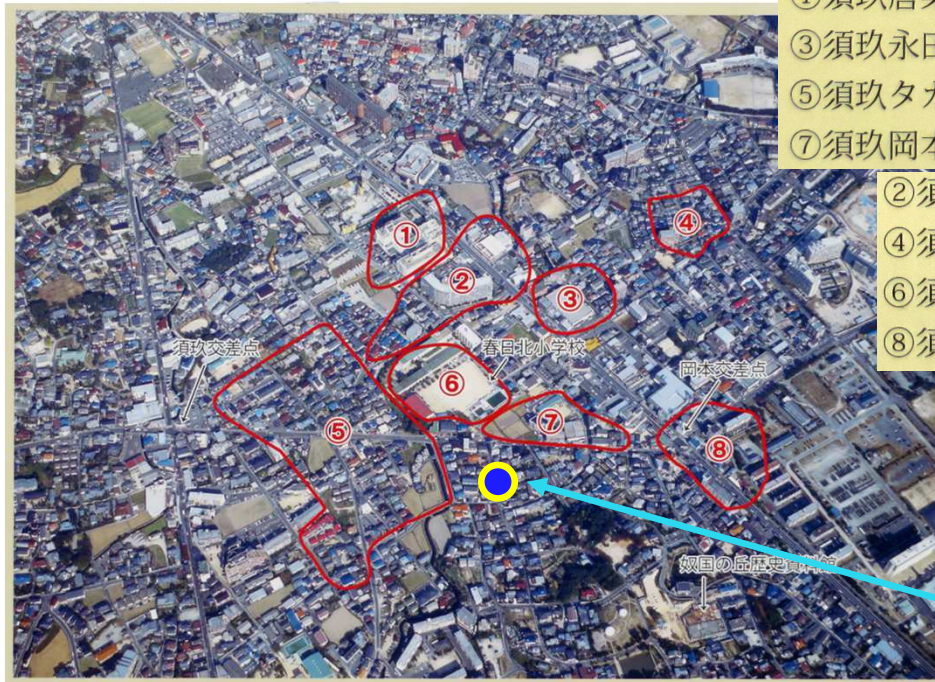
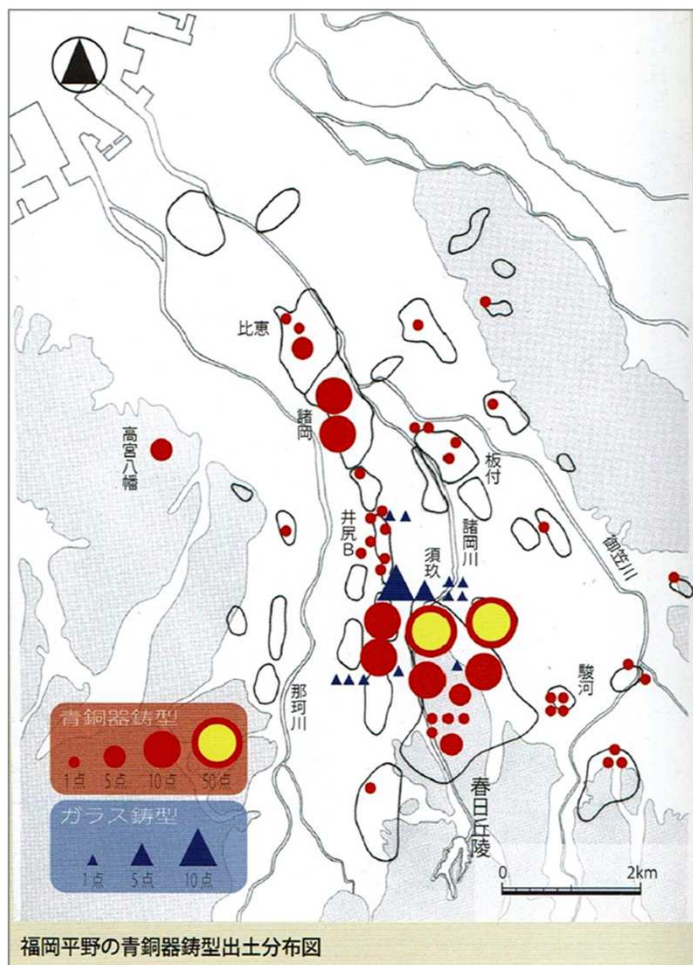
ガラス勾玉

頭部に細かい溝をもつ丁子頭定形勾玉で、表面が風化するが、本来は鮮緑色。弥生時代の勾玉は、ガラス製のものが最も価値が高く、さらに5cmを超える本品は最大級である。長さ5.2cm。九州大学。



多槌式銅剣

通常の銅剣に比べ異形を呈しており、剣身の片面に「槌」と呼ばれる溝が4条通るため、この名称がつけられている。国内では本例のみで、朝鮮半島でも2例しか確認されており、生産地についても諸説がある。長さ35.1cm。東京国立博物館。(春日市1995年から転載)



## 須玖遺跡群北部の青銅器工房跡

- ① 須玖唐梨遺跡 (鉄器工房跡)
- ③ 須玖永田 A 遺跡 (青銅器工房跡)
- ⑤ 須玖タカウタ遺跡 (青銅器工房跡)
- ⑦ 須玖岡本遺跡坂本地区 (青銅器工房跡)
- ② 須玖五反田遺跡 (ガラス工房跡)
- ④ 須玖黒田遺跡 (青銅器工房跡)
- ⑥ 須玖坂本 B 遺跡 (青銅器工房跡)
- ⑧ 須玖尾花町遺跡 (青銅器工房跡)

須玖岡本王墓出土地

# 王墓③ 前原・平原地域

## ● 平原王墓

- 弥生時代後期・古墳時代直前の時代に
- 三種の神器が揃い
- 飛びぬけて、充実した副葬品が出土。
- 日本最大の大型銅鏡 5枚は、圧巻。

## ● 三雲南小路王墓・井原鎚溝王墓

- 平原王墓に先行する王墓
- 三種の神器や充実した副葬品
- 共に甕棺墓



30-1 銅鏡の大きさの比較



23-1 銅鏡の出土枚数比較図

三雲南小路王墓では1号、2号甕棺合せて57枚に上る大量の銅鏡が出土した。これほどの鏡の大量副葬は弥生時代はもとより、古墳時代に入ってから突出しており、ほとんど例がない。





# 寺沢薫氏の「王墓」に関する見解

✓ 寺沢薫氏の著書「王権誕生」の年表と中公選書「卑弥呼とヤマト王権」の両著書から抜粋

- 紀元前2世紀頃：
  - 北部九州でクニから国への統合が始まる
- 紀元前1世紀頃：
  - ナ国を中心に巨大な青銅器生産のテクノポリス形成。
  - ナ国やイト国がより大きな部族的国家連合の形成が始る。
- 西暦5年：中国・「新」へ東夷王 大海を渡り朝献
  - 須玖岡本遺跡の王墓—東夷王の墓と推定
- 西暦57年：倭の奴国王が後漢に朝献 金印受領
  - 三雲南小路遺跡の王墓—倭の奴国王と推定(ナ国王で奴国全体の王)
- 西暦107年：倭国王・師升後漢に朝献 生口160人献上
  - 井原鍵溝遺跡の王墓-師升と推定

後漢	中国	後漢	新	前漢
弥生後期	日本	後期	弥生中期	
一九〇	東アジアの主な出来事 一四〇 羌族前漢陵を焼く	一〇七 倭国王帥升ら後漢王朝に朝貢し、生口百六十人を献じる。	五七 『後漢書』東夷伝(福岡・志賀島で発見された「漢委奴国王」の金印) 五七 『後漢書』倭の奴国王が後漢に朝貢し、生口百六十人を献じる。	前二〇六 漢の劉邦、秦を滅亡 前一〇八 衛氏朝鮮滅亡、漢、四郡設置 前一一四 武帝、即位 前三三 成帝即位
第二次高地性集落の後半期に、分布が東西に広がる。(大阪・東山遺跡)	この頃、キビで銅鐸のマトリが終焉。(岡山・高塚遺跡銅鐸埋納)	この頃イト国を盟主とするイト倭国が成立。(井原鍵溝遺跡の王墓—倭国王帥升と推定)	北部九州に対する緊張感が高まり、瀬戸内海沿岸を中心に高地性集落がさかんにみられる。(香川・紫雲山遺跡) 須玖岡本遺跡の王墓—東夷王の墓と推定(卑弥呼とヤマト王権)	この頃、青銅の武器形祭器と銅鐸を使ったマトリが始まる。(八雲南小路の第1段階)
	鏡を割る儀礼が増える。(福岡平原遺跡一号墓(最後のイト倭国王墓))	列島の主なできごと(カヅコ内は関係する遺跡や遺物) この頃には、『魏志倭人伝』記載の国々存在か？ (近畿式銅鐸と三遠式銅鐸) (邪馬台国は「ヤマト」狗奴国は濃尾平野か？)	北部九州に對する呪禁として、近畿とイツモで青銅器の大量埋納が行われる。(兵庫・桜ヶ丘遺跡の銅鐸・銅戈の埋納、荒神谷/加茂岩倉遺跡の銅剣、銅矛や銅鐸の埋納)	倭人は「百余国」に分かれていた。(『漢書』地理志) 北部九州の戦争激化し広域化する。(吉野ケ里や西小田遺跡の「首なし」「首だけ」人骨)
	後漢王朝の衰退によって、イト倭国の権威失墜。(『後漢書』東夷伝)		ナ国やイト国がより大きな部族的国家連合の形成が始る。(三雲南小路遺跡の王墓—倭の奴国王と推定)	ナ国を中心に巨大な青銅器生産のテクノポリス形成。(福岡・須玖遺跡群)
			西日本各地で独自性のある青銅器のマトリが生まれる。(近畿でもオウや首長の住処、高殿、オウ族墓が出現。池上曾根遺跡の巨大高殿、唐古・鍵遺跡、加美遺跡)	
			西日本各地で独自性のある青銅器のマトリが生まれる。(近畿でもオウや首長の住処、高殿、オウ族墓が出現。池上曾根遺跡の巨大高殿、唐古・鍵遺跡、加美遺跡)	

# 北九州の主要地区と王墓

副葬品として、剣・勾玉・鏡が出土する地域

時代		唐津	糸島前原	早良	福岡平野	筑紫平野	遠賀川立岩
弥生早期		水田稲作支石墓	水田稲作支石墓	水田稲作支石墓	水田稲作	水田無し	水田無し
		夜臼式	夜臼式	夜臼式	夜臼式		
弥生	前期	初期に棺専用のカメを開発	遺跡数の増加無し 甕棺墓に副葬品皆無	板付I式土器環濠集落	遺跡数急激な増加 甕棺墓	甕棺出土 有柄式磨製石剣出土	下流域 水田
		支石墓に複数の甕棺		集落の拡大拠点集落発生			
	中期	宇木汲田青銅器を副葬有力者墓		木棺墓王墓	甕棺墓から銅剣・銅戈	鉄器出土	スダレ戦争遺跡
		後期には、有力者の墓が消滅	三雲南小路王墓	樋渡遺跡(王墓ではない)支配層の墳墓	須玖岡本王墓	鉄器普及	夫婦岩甕棺墓
			井原鍬溝王墓		甕棺墓急速に減少		立岩・堀田王墓
	後期	桜馬場に王墓	甕棺墓存続	中期集落は継承するが遺構・遺物は減少	墓の数激減 激動の時代	住宅跡の覆土中から多量の鉄器 墳墓から鏡・青銅器・鉄器	
王墓は出ないがその後も桜馬場が有力集団		平原王墓その後王墓無し	後漢鏡副葬の墓多数 王墓無し				

# 甕棺の時期別・分布図の前提条件

甕棺の時期大別の指標

橋口編年	KI			KII			KIII			KIV			KV		
	a	b	c	a	b	c	a	b	c	a	b	c	a	b	c
弥生時代	前期			中期						後期					
藤尾編年 (1988-)以降	I		II		III		IV		V						
	刻目突帯文	板付I 伯玄社	金海 城ノ越	汲田	須久	立岩(古)	立岩(新)	桜馬場	三津永田	日佐原					
弥生時代	前期			中期						後期					
製作技法	壺の製作技法			甕棺独自の製作技法の成立			焼成法の進歩 器面調整技法の確立								
系列	大型棺	→			器高低下										
	中型棺	←			器高増大										
分布	唐津・早良 佐賀・神埼 福岡・春日へ			南筑後・熊本 大村へ			嘉穂		熊本で衰退 福岡で衰退 佐賀で衰退		残存甕棺壺 日田・糸島で 特殊に展開				
副葬品				漢以前の 半島系青銅器			半島系・前漢 九州産青銅器		王莽・後漢鏡 楽浪漢堂系 九州産青銅器						

地域毎の時期別基数

地域	I	II	III	IV	V	大形棺計	時期不明	補正大形棺計	甕棺総基数
西北九州	27	7	1	1	2	38	74	75	158
唐津	21	58	48	15	2	144	142	215	331
糸島	65	30	19	10	3	127	6	130	215
早良	11	59	57	10	9	146	1,064	708	1,586
福岡・春日	36	14	327	27	2	406	878	845	1,769
粕屋	0	1	26	1	3	31	32	47	77
嘉穂	0	2	31	3	0	36	210	141	293
二日市	35	8	30	58	0	131	106	184	241
朝倉	2	60	152	52	3	269	538	538	900
小郡・鳥栖	29	111	86	151	2	379	1,964	1,361	2,522
神埼	19	155	144	33	0	351	2,548	1,625	2,951
佐賀	38	92	37	1	6	174	230	289	454
小城	4	2	3	5	0	14	384	206	464
多久	0	37	93	2	0	132	40	152	233
武雄	3	2	3	4	0	12	0	12	15
大村	0	1	7	7	0	15	0	15	30
島原	5	1	5	5	0	16	40	36	65
熊本	29	8	27	0	0	64	84	106	175
筑後南部	9	50	8	3	24	94	166	177	297
久留米	1	20	38	2	4	65	46	88	157
日田	0	0	0	3	3	6	16	14	19
鹿児島	0	0	3	0	0	3	0	3	3
合計	334	718	1,145	393	63	2,653	8,568	6,967	12,955

- 1988年の段階の資料で、この中には、含まれていない甕棺が計4500件あると、断り書き。
  - 筑紫野市の隈・西小田:1800件、神埼郡吉野ヶ里:1500件、福岡市の吉武遺跡:1200件

# 甕棺の時期別・分布図の前提条件

甕棺の時期大別の指標

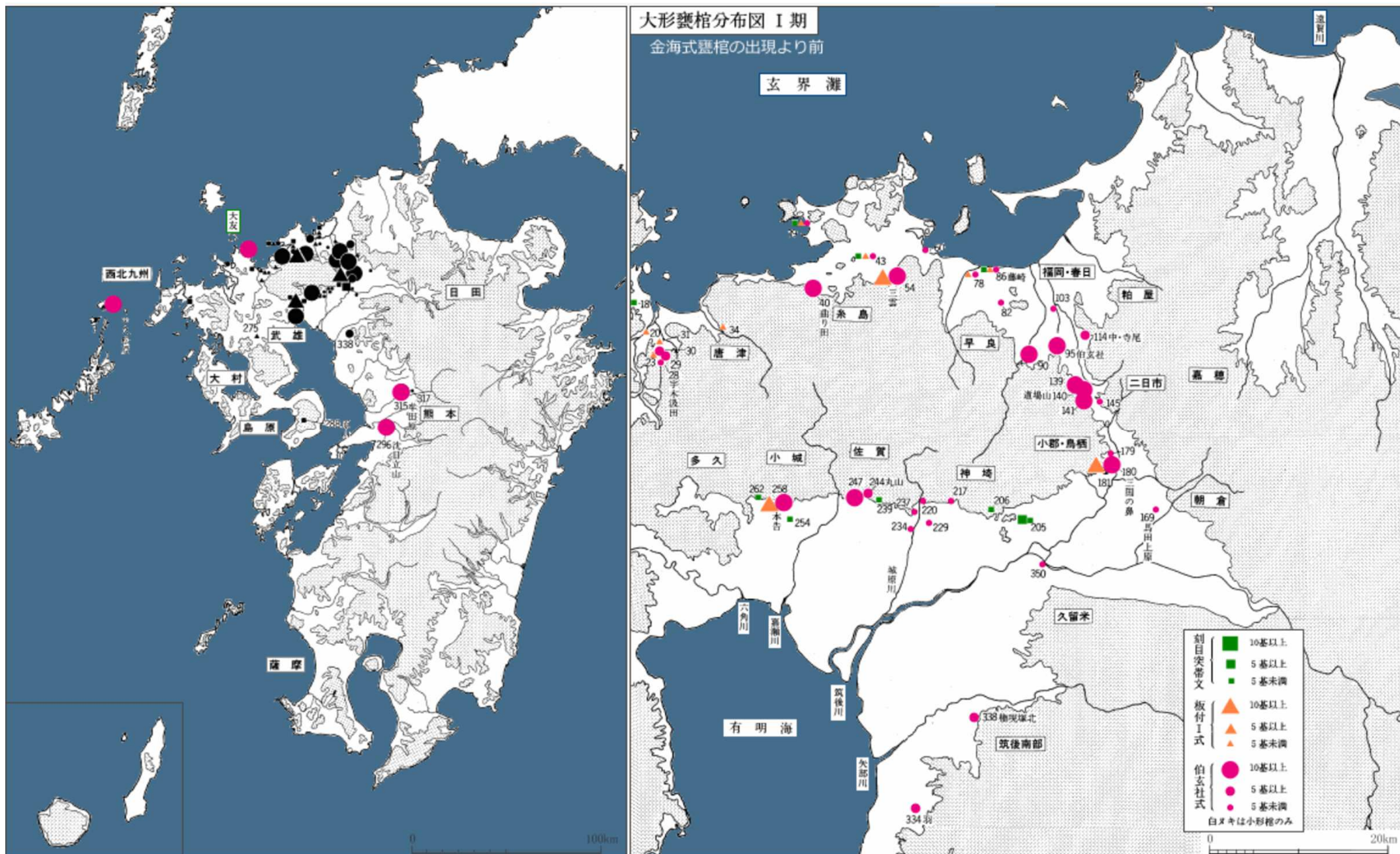
橋口編年	KI			KII			KIII			KIV			KV		
	a	b	c	a	b	c	a	b	c	a	b	c	a	b	c
弥生時代	前期			中期						後期					
藤尾編年 (1988-)以降	I		II		III		IV		V						
	刻目突帯文	板付I 伯玄社	金海 城ノ越	汲田	須久	立岩(古)	立岩(新)	桜馬場	三津永田	日佐原					
弥生時代	前期			中期						後期					
製作技法	壺の製作技法			甕棺独自の製作技法の成立		焼成法の進歩 器面調整技法の確立									
系列	大型棺	→			器高低下										
	中型棺	←			器高増大										
分布	唐津・早良 佐賀・神埼 福岡・春日へ		南筑後・熊本 大村へ		嘉穂		熊本で衰退 福岡で衰退 佐賀で衰退		残存甕棺壺 日田・糸島で 特殊に展開						
副葬品	漢以前の 半島系青銅器			半島系・前漢 九州産青銅器 鉄製武器		王莽・後漢鏡 楽浪漢堂系 九州産青銅器									

地域毎の時期別基数

地域	I	II	III	IV	V	大形棺計	時期不明	補正大形棺計	甕棺総基数
西北九州	27	7	1	1	2	38	74	75	158
唐津	21	58	48	15	2	144	142	215	331
糸島	65	30	19	10	3	127	6	130	215
早良	11	59	57	10	9	146	1,064	708	1,586
福岡・春日	36	14	327	27	2	406	878	845	1,769
粕屋	0	1	26	1	3	31	32	47	77
嘉穂	0	2	31	3	0	36	210	141	293
二日市	35	8	30	58	0	131	106	184	241
朝倉	2	60	152	52	3	269	538	538	900
小郡・鳥栖	29	111	86	151	2	379	1,964	1,361	2,522
神埼	19	155	144	33	0	351	2,548	1,625	2,951
佐賀	38	92	37	1	6	174	230	289	454
小城	4	2	3	5	0	14	384	206	464
多久	0	37	93	2	0	132	40	152	233
武雄	3	2	3	4	0	12	0	12	15
大村	0	1	7	7	0	15	0	15	30
島原	5	1	5	5	0	16	40	36	65
熊本	29	8	27	0	0	64	84	106	175
筑後南部	9	50	8	3	24	94	166	177	297
久留米	1	20	38	2	4	65	46	88	157
日田	0	0	0	3	3	6	16	14	19
鹿児島	0	0	3	0	0	3	0	3	3
合計	334	718	1,145	393	63	2,653	8,568	6,967	12,955

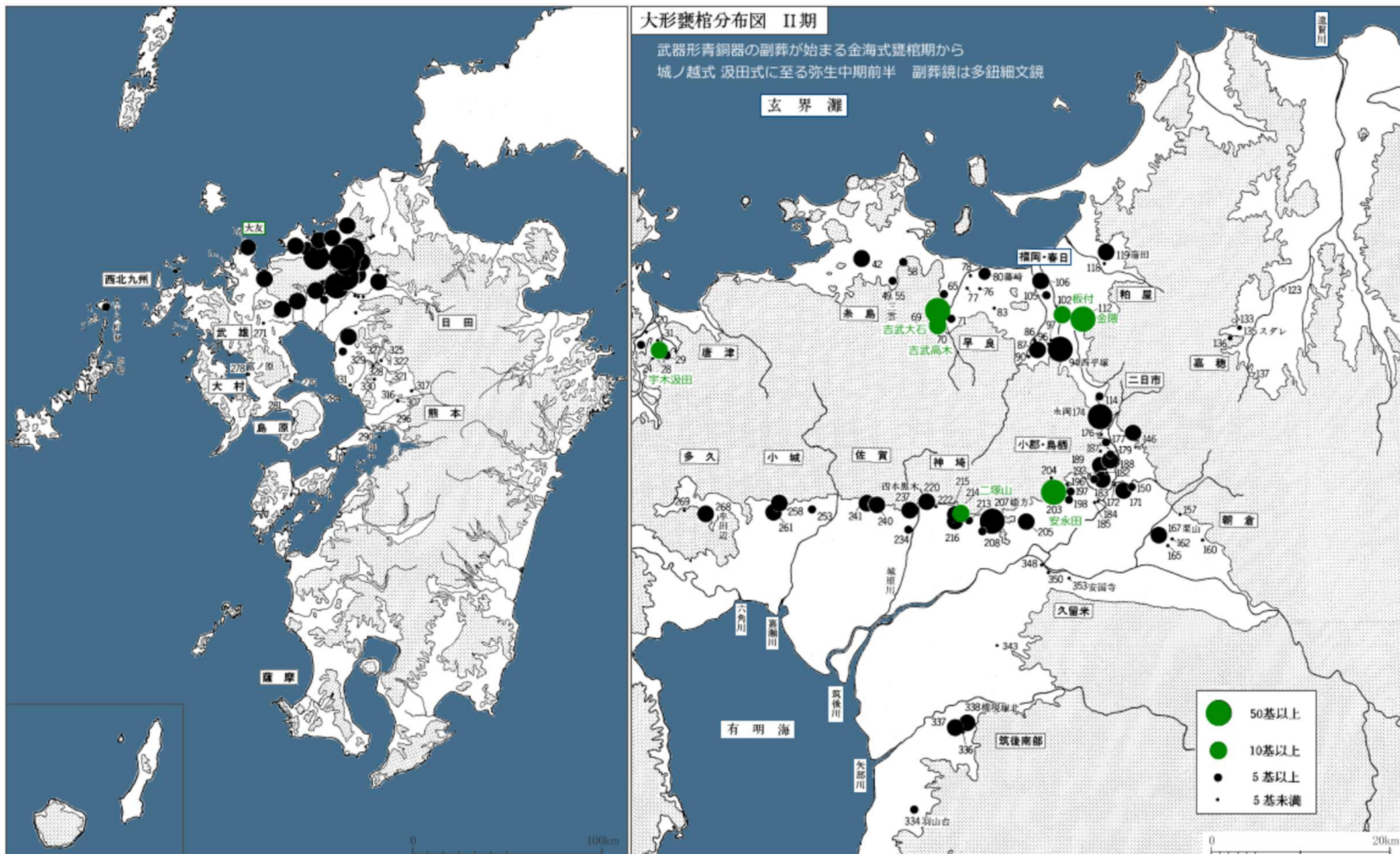
- 1988年の段階の資料で、この中には、含まれていない甕棺が計4500件あると、断り書き。
  - 筑紫野市の隈・西小田:1800件、神埼郡吉野ヶ里:1500件、福岡市の吉武遺跡:1200件

# I 期 (刻目突帯文/板付I/伯玄社)



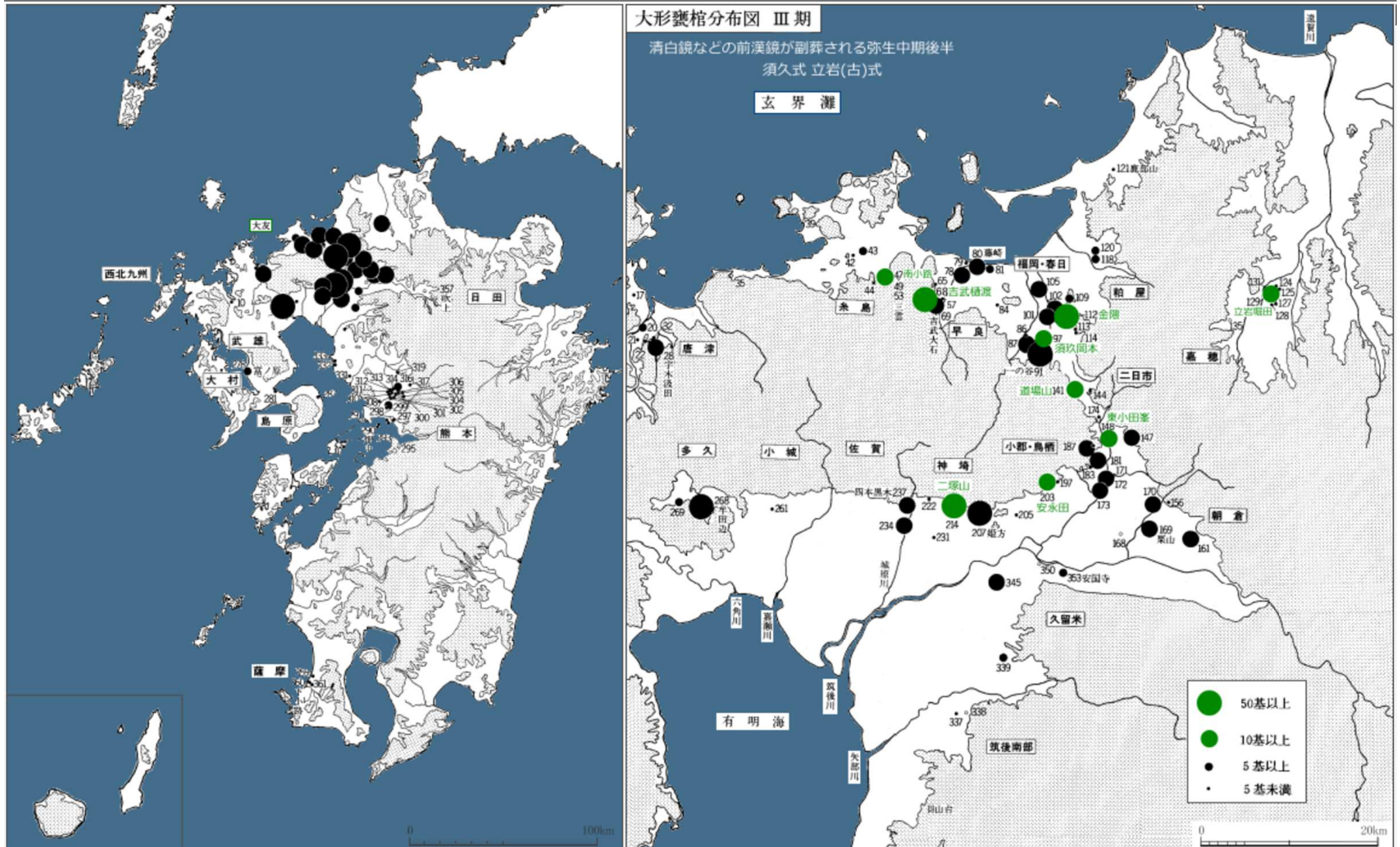
- 中心は背振り山地周辺地域
- 離れた地域の熊本県と五島・鳴子付近に注目。
- 刻目突帯文時代の甕棺としたものは、西北縄文人の子供を埋葬用の土器棺。

# II 期 (金海/城ノ越/汲田)



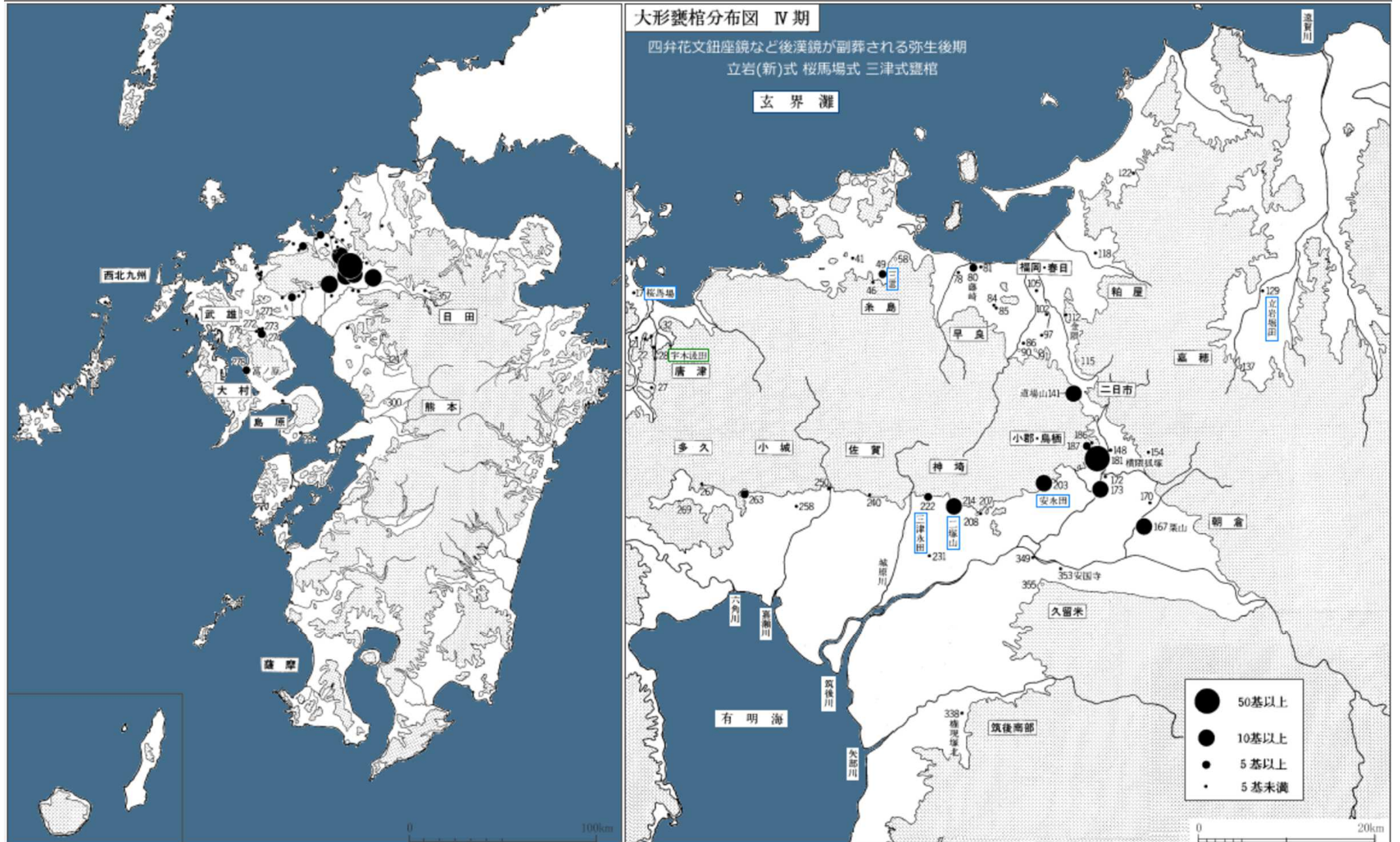
- 中心は、背振り山地周辺で変わらず。糸島減少。早良増大。 ☆ 弥生前期と中期の境目の時期の城ノ越式土器。
- 離れた地域の熊本県と五島・鳴子付近に甕棺が残る。

# III 期 (須玖/立石(古))



- 遠賀川流域の嘉穂地区(飯塚立岩遺跡)に突然甕棺墓が現れる。
- 熊本県には、相変わらず甕棺が、分散して存在。
- 鏡・剣を副葬した10号甕棺は二日市地域産の甕棺

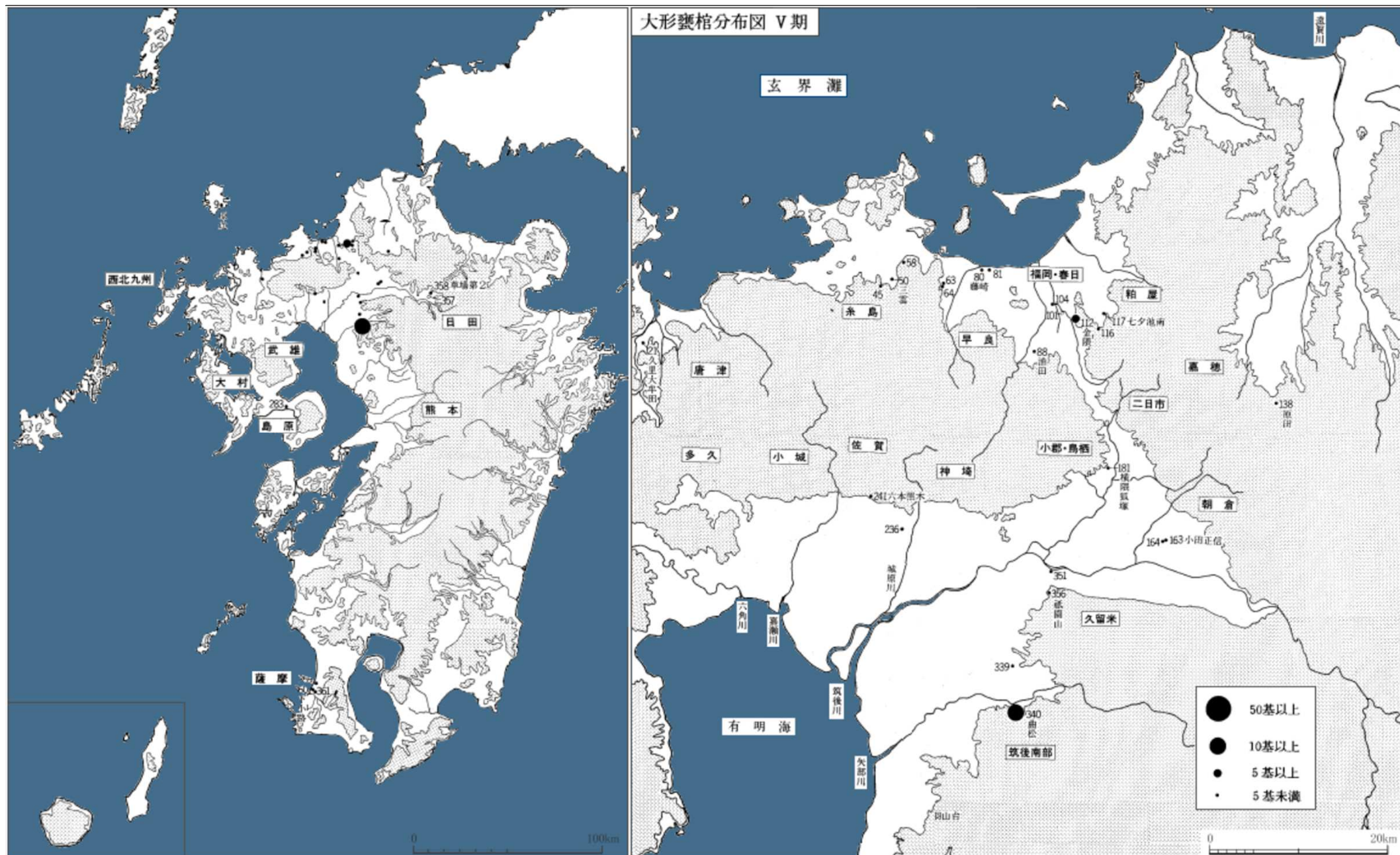
# IV 期 (立石(新)/桜馬場/ 三津永田)



- 甕棺は一気に減少。太宰府の南側の小郡・鳥栖を中心に残存。
- 熊本は皆無に。遠賀川流域もほぼ皆無に。



# V 期 (日佐原)

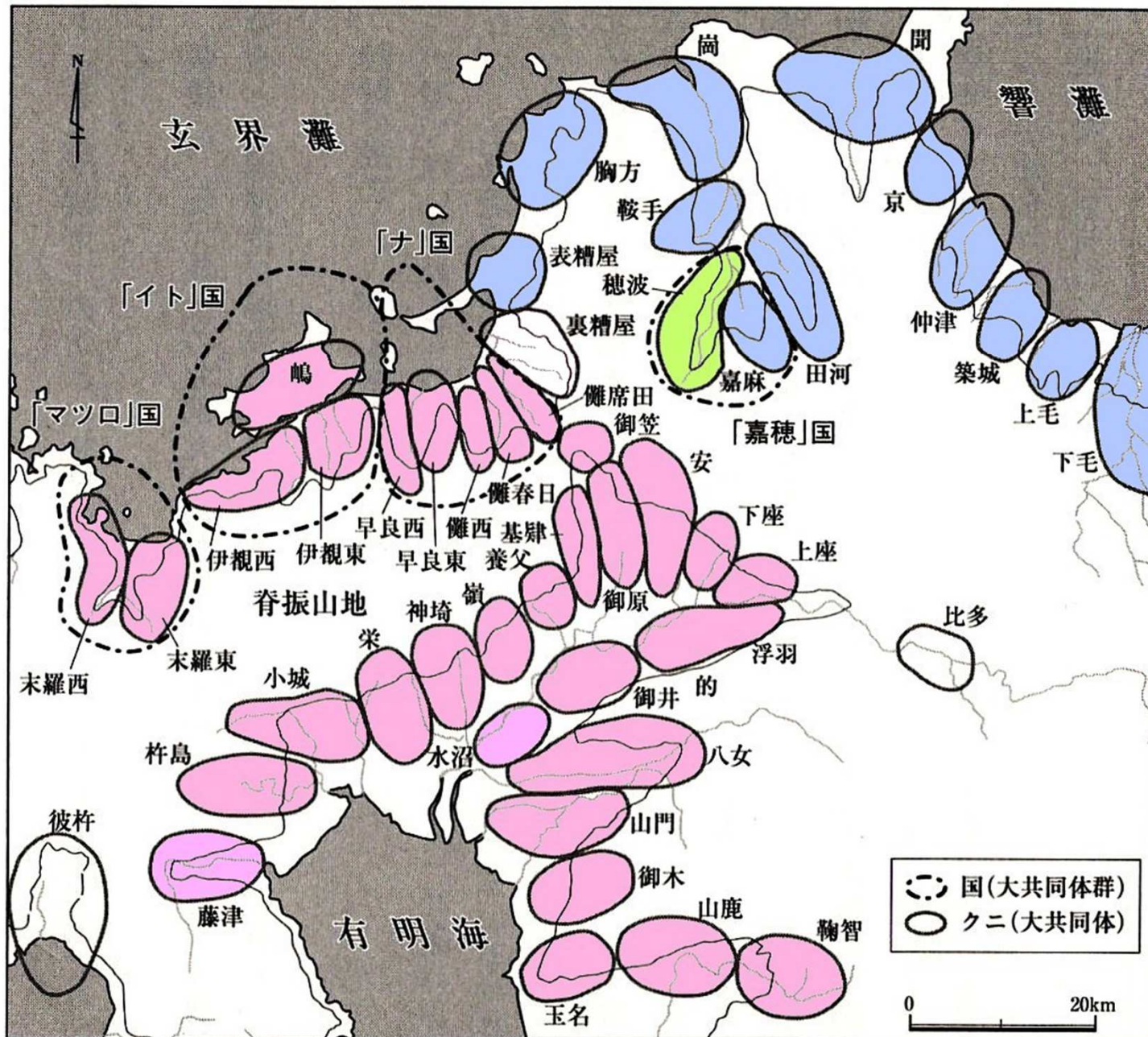


- 祇園山古墳に3基、その南の八女市の曲松遺跡に21基。共に最終期の日佐原式甕棺。
- 曲松古墳群の南には熊本県との県境。時期によっては熊本・菊池に属した。その東南3km流には、たたら製鉄・鑄造遺跡あり。

# 甕棺の分布へのコメント

- 藤尾慎一郎著「九州の甕棺-弥生時代甕棺墓の分布とその変遷-」の記述で注目する記述がある。
  1. III期に甕棺墓の規模、副葬品の量と質において頂点をきわめた福岡・春日、神埼、朝倉では、甕棺墓自体が衰退し、なかでも福岡・春日ではその傾向が強く、(中略)一斉に他の墓制へ転換する。
  2. 嘉穂では立岩遺跡周辺に大形棺が出現する。
    - 立岩遺跡の10号甕棺は二日市地域の道場山型とされ、(中略)大形棺が持ち込まれている。
  3. 熊本における北部九州系大形棺と在地甕棺の関係、(中略)島原や薩摩における熊本系中形棺の存在など検討すべき課題は多い。
- 注目する又は気が付いた点。
  - 甕棺は、三種の神器の剣・鏡・勾玉を副葬する王墓も使用し、その王墓と同地区の墓に甕棺が多く使用されていることから、甕棺は天孫族の墓制と推定する。
  - I期/II期/III期の分布図から、天孫一族は、
    1. 背振山地の南・東・北・北西に居住していたと推定。(神埼・吉野ヶ里・隈・西小田・春日・須玖・
    2. 長崎県の半島/五島列島や熊本県(菊池川流域/白川流域)にも初期から天孫一族が居た。
  - 北部九州の遠賀川流域は、初期のI期/II期には甕棺は出土せず、天孫一族とは別の、「敵対した一族」の居住地と思われる。
  - III期に頂点を極めた後に、福岡・春日＝須玖(岡本など)の地域は、「敵対した一族」に占拠され、墓制も変わったものと考えられる。
  - 遠賀川流域に突然出たIII期の甕棺は、「敵対した一族」の中に、王族が飛び込んできた様相に見える。
    - その甕棺自体は、天孫族の二日市地域から運ばれた。
  - 初期から薩摩に天孫族が居たことと、薩摩の甕棺は熊本から運ばれたこと。
    - III期に熊本に北部九州の大型甕棺運ばれたことに、注目する。
  - 甕棺の終焉期のV期に、祇園山古墳に3基、その南側の曲松古墳に、天孫一族の甕棺が出土することに注目。

# 天孫族(天孫族)の集落(クニ)の分布(初期状態)

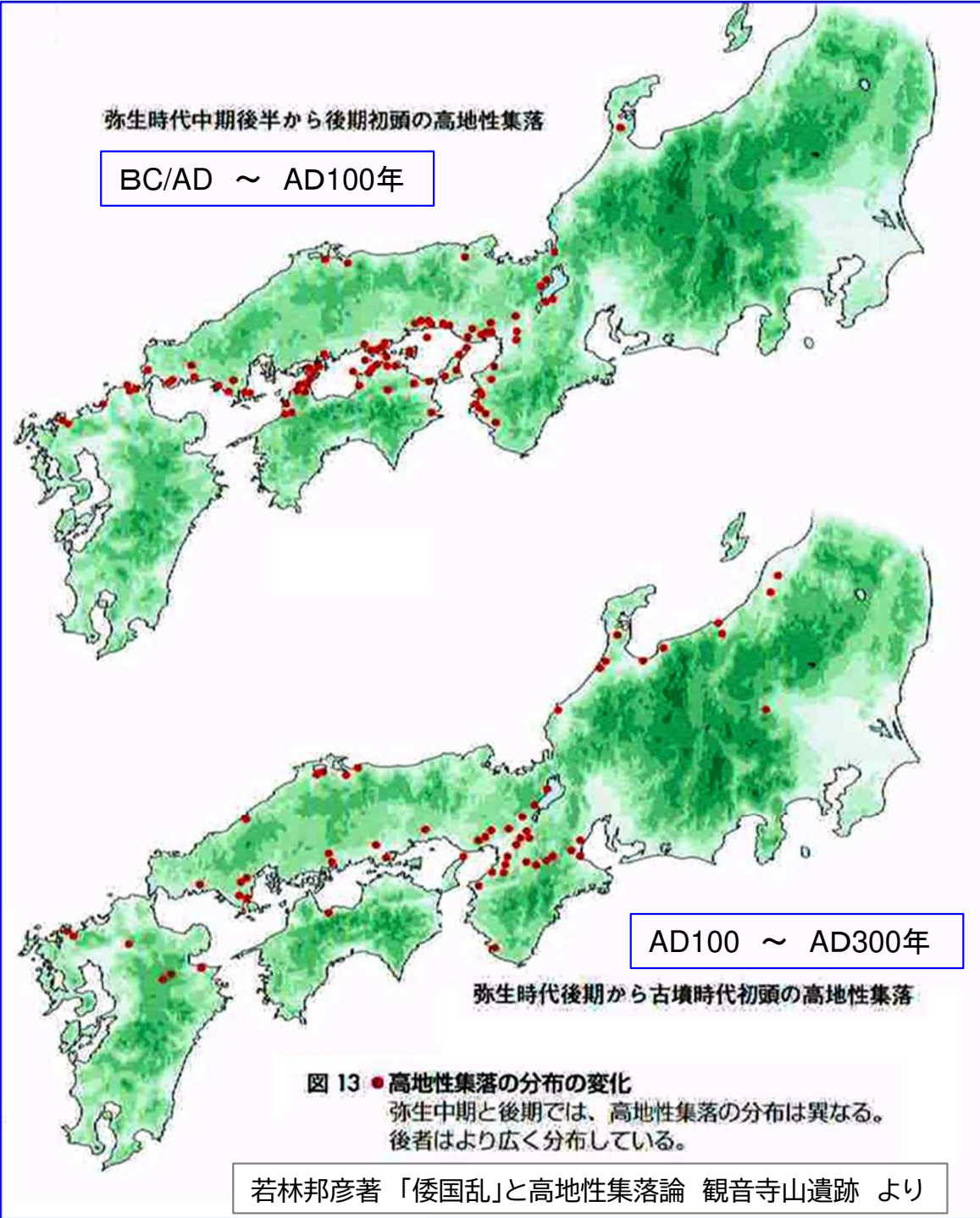


- 甕棺の時期別分布図から、天孫族の分布を判断した。
  - 赤系で着色した部分は天孫族
  - 青系で着色した部分は出雲族

図10 紀元前後の北部九州の部族的国家群 (寺沢、2018年より)

# 高地性集落

寺 沢 案				
実年代	時代	時期	近畿編年	北九州編年
500 — 前5世紀	縄 文	晩期後半 (突帯文土器)	滋賀里Ⅳ式	山ノ寺式 (曲り田式)
			(口酒井)	1
400 — 前4世紀			船橋式	夜臼式
				2
300 — 前3世紀			長原式	板付Ⅰ式
				1 2
200 — 前2世紀	弥 生	前期	第Ⅰ様式	板付Ⅱ式
			1 2 3 4	1 2 3
100 — 前1世紀		中期	第Ⅱ様式	城ノ越式
			1 2 3	1
A. D. 1世紀	代		第Ⅲ様式	須玖式
			1 2	2 3 4 5
100 — 2世紀		後期	第Ⅳ様式	高三瀧式
			1 2 3 4	1 2
200 — 3世紀			第Ⅴ様式	下大隅式
			1 2 3	3 4
300 — 4世紀	古 墳	(初頭)前期	庄内式	西新式
			0 1 2 3	5
400 —			布留式	(土師器)
			1 2 3 4	Ia Ib IIa IIb IIIa
(須恵器)				



高地性集落は北九州の情報が少ない。

# 青銅祭器

BC300~175	BC175~100	BC100~75	BC75~AD50	AD50 ~ 150
-----------	-----------	----------	-----------	------------

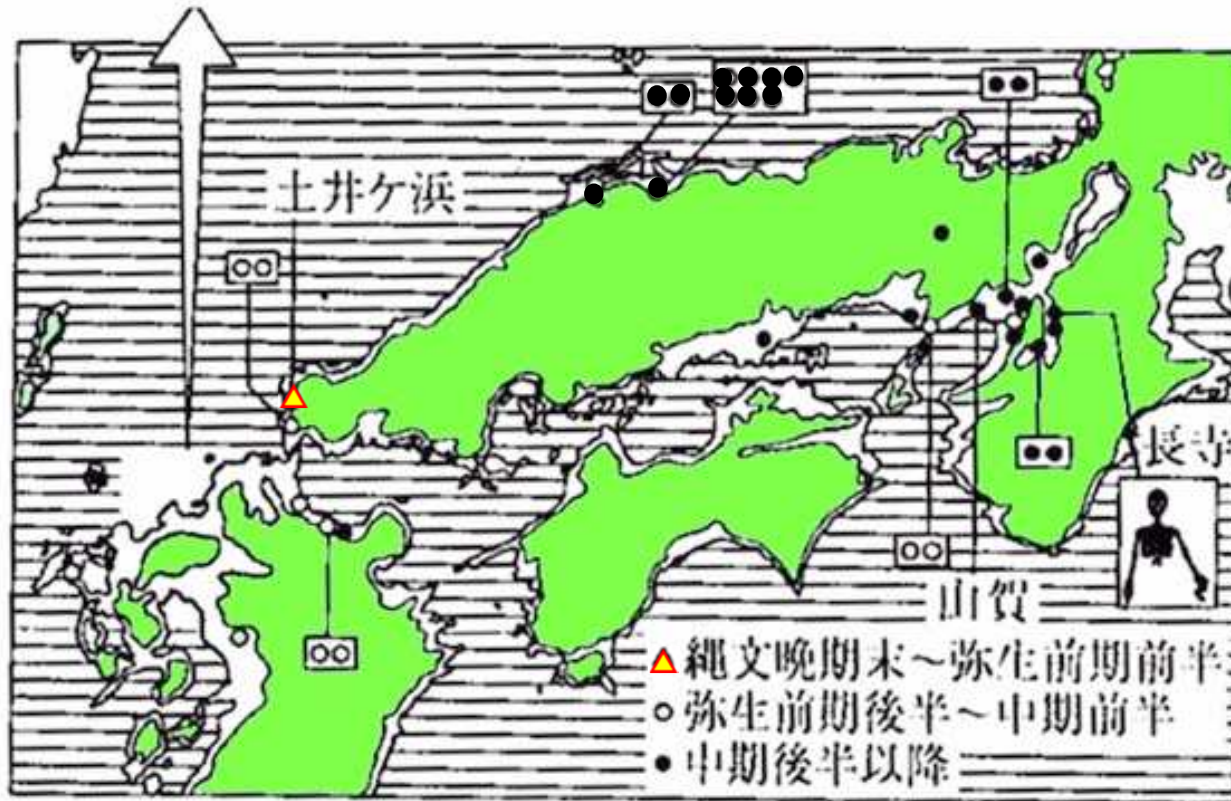
寺 沢 案						
実年代	時代	時期	近畿編年	北九州編年		
500	縄文	晩期後半(突帯文土器)	滋賀里IV式	山ノ寺式 (曲り田式)		
前5世紀			(口酒井)	1		
400			船橋式	夜白式		
前4世紀			長原式	板付I式		
300	弥生	前期	1	1		
前3世紀			第I様式	2	板付II式	
200			3	3		
前2世紀			4	3		
100		中期	1	城ノ越式	1	
前1世紀			第II様式	2	2	
B.C.			第III様式	3	須玖式	3
A.D.			第IV様式	4	4	5
1世紀		後期	第V様式	0	高三瀧式	1
100				1	2	
2世紀				2	3	
200				3	3	
3世紀	(初頭)前期	庄内式	0	西新式	5	
300			1			Ia
4世紀			2	IIa		
400			3	IIb		
	墳		4	IIIa		
				(須恵器)		



- 青銅祭器の時代区分は、やや古い方に寄っているように思える。

# 戦争遺跡

寺 沢 案				
実年代	時代	時期	近畿編年	北九州編年
500	縄文	晩期後半 (突帯文土器)	滋賀里Ⅳ式 (口酒井)	山ノ寺式 (曲り田式)
前5世紀			船橋式	夜臼式
400			長原式	板付Ⅰ式
前4世紀				
300	弥生	前期	1	1
前3世紀			2	2
200			3	3
前2世紀			4	城ノ越式
			1	
100			2	須玖式
前1世紀	3			
	B.C.	4		
A.D.	5			
1世紀	後期	第Ⅴ様式	0	高三瀨式
			1	2
100	第Ⅵ様式	1	2	下大隅式
2世紀				
200	(初頭)前期	庄内式	0	西新式
3世紀				
300	古墳	布留式	1	(土師器)
4世紀			2	
400			3	
			4	



戦争犠牲者の分布 縄文晩期末から弥生中期後半。▲、○、●は全身を、絵に示したものはその部分を発掘 (『倭国乱る』国立歴史民俗博物館編〔朝日新聞社、1996年〕を参考)

寺澤薫著「王権誕生」より 土井ガ浜と青谷上寺地は丸地が時期を変更

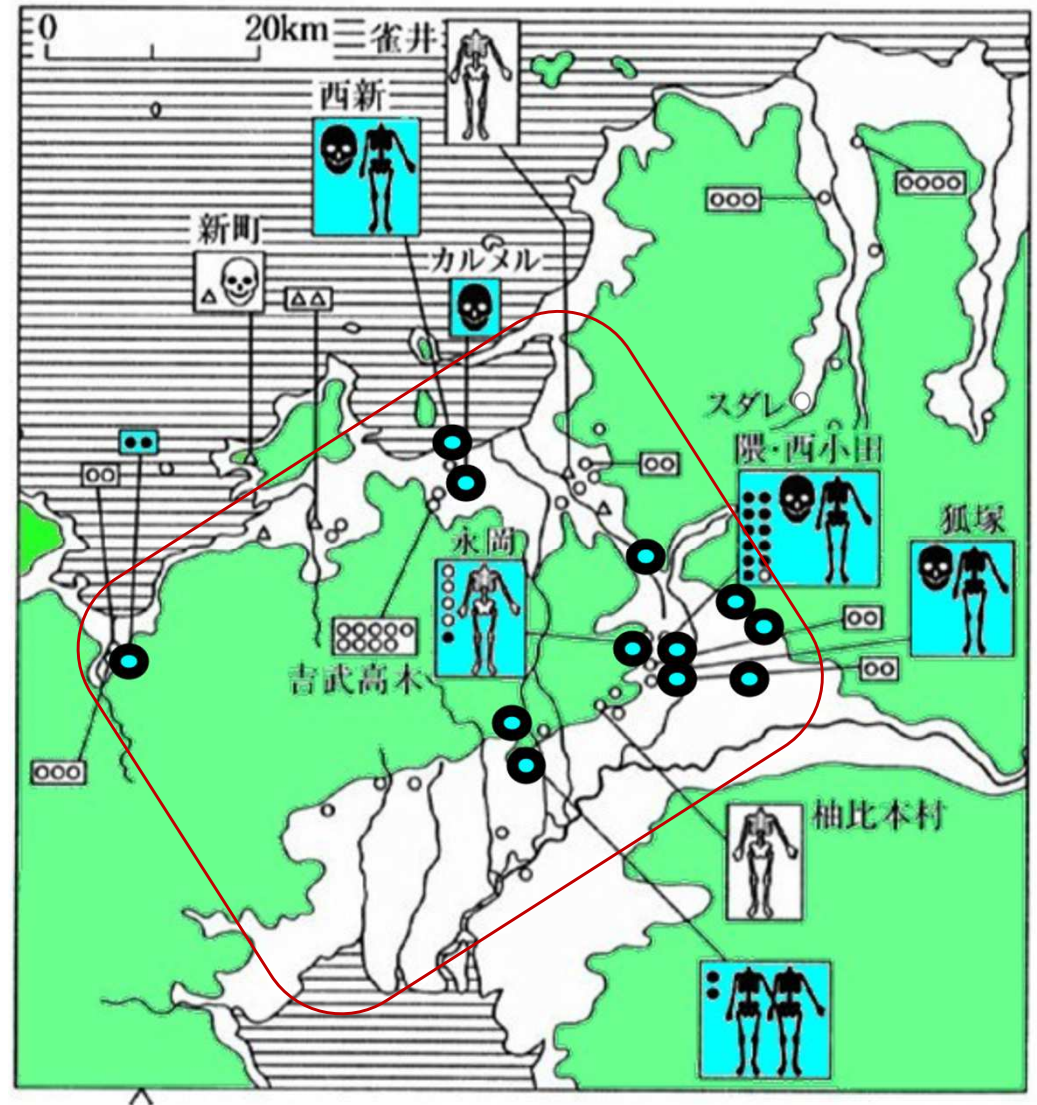
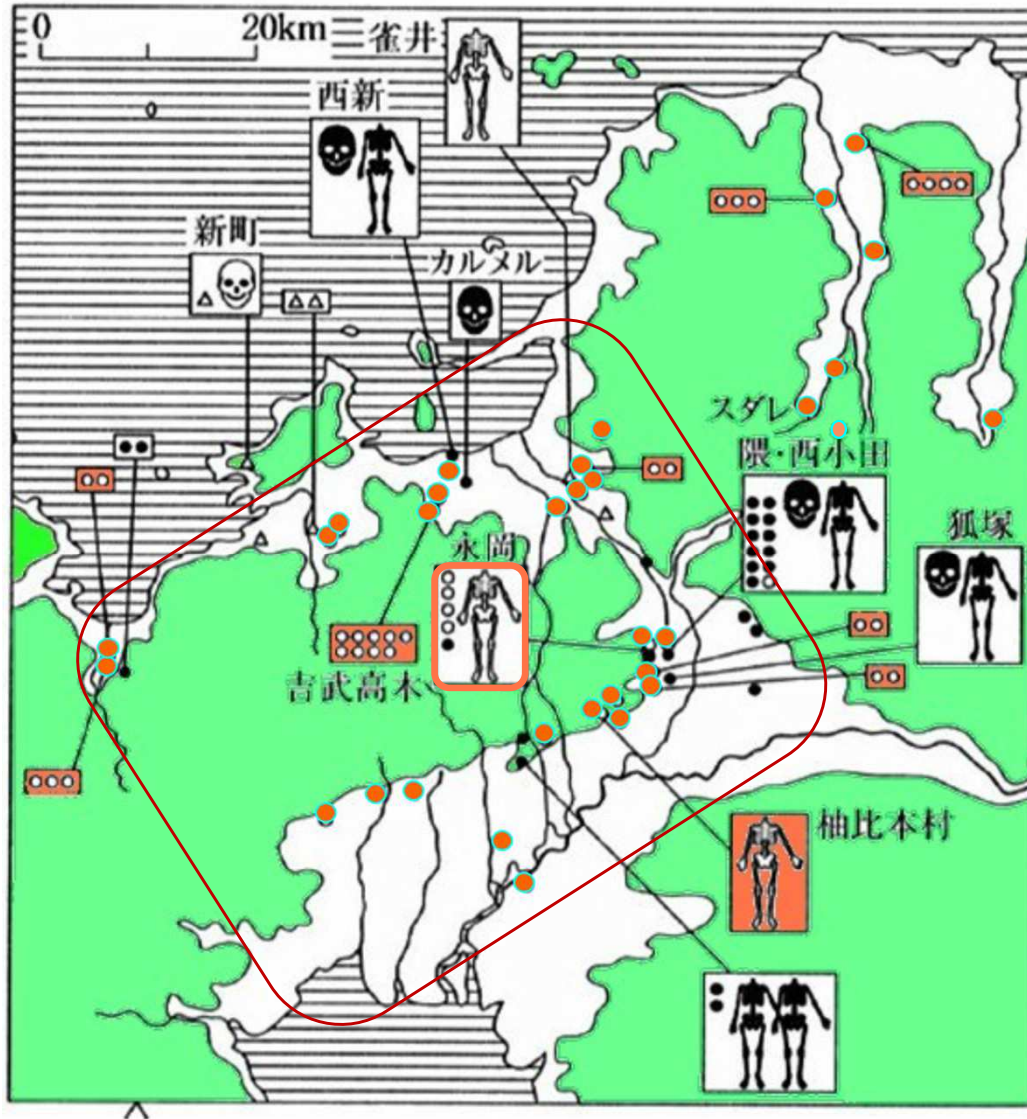
戦争遺跡は、主に北九州と出雲地方・畿内・長野県に分布する。北九州以外の地域は、北九州の争乱が収まった後の時代のもの

- その受傷人骨は、勝者側のものか？ それとも敗者側のものか？
- 戦場に残された敗者の遺骨は、消滅して残らない。(酸性土壌のため)
- 勝者側は、戦死・負傷した兵士を、故郷に連れ戻す。埋葬され残る。
- **戦傷人骨の遺跡は、勝利者の側のもの。**(特異な条件でのみ敗者側も残る)

# 戦争遺跡 時期別色分け地図

●: 弥生 前期後半 中期前半

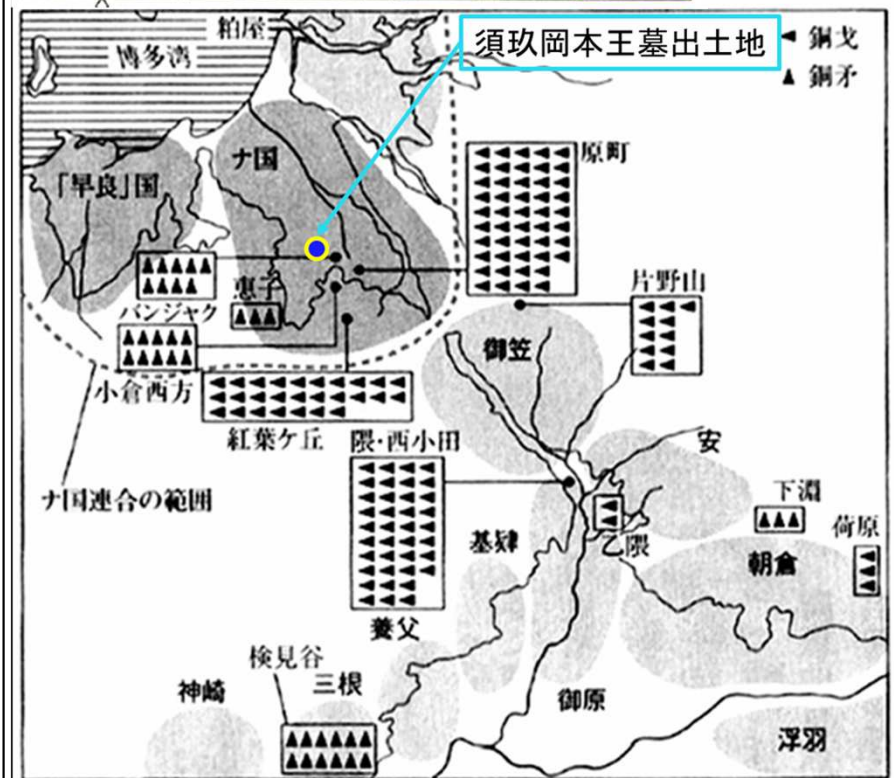
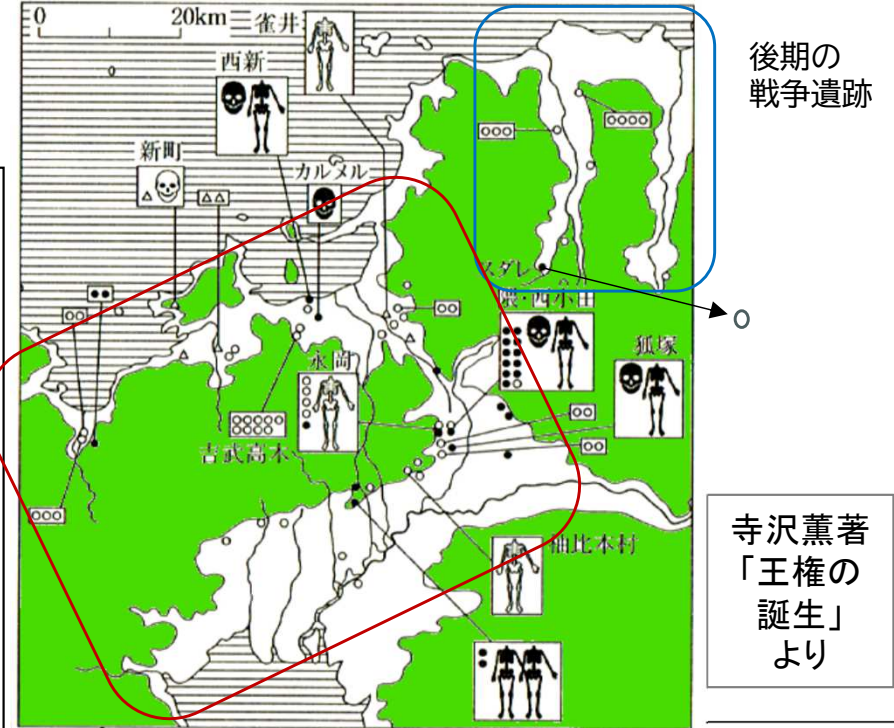
●: 中期後半以降



- 赤四角の枠は、天孫族の領域。
- 前期後半から中期前半の時期では、長期間・複数の戦いがあり、双方が勝利した？
- 中期後半以降は天孫族が勝利

# 北九州の戦況を、再検討する

- 弥生前期後半～中期前半
  - 北九州全域に○が多く、ある時は、出雲族側が勝ち、別の時は、天孫族側が勝ったものとする。
  - 須玖岡本遺跡の状況から、この地域は天孫族が敗北し、一旦、出雲族側になったと考えられる。
- 弥生中期後半以降
  - 激しい戦いが行われ、天孫族に多くの戦傷者●を出したが勝利した。
    - 遠賀川側は、戦傷者を故郷に戻すことは出来ないほどに、敗退した。
  - この時期が「倭国大乱」にあたる。
  - 勝利した天孫族側は、敗者の旗指物であった青銅製銅戈・銅矛を、天孫族の王墓(須玖岡本遺跡)に集めて戦果を示した上、周辺の山中に埋納した。
  - 更に、隈・西小田・御笠・安・神崎の各地に、勝利した軍隊が戻る時には、打ち負かした敵の旗指物を戦果として持ち帰り、故郷に勝利の報告を行ない、埋納した。
- 北九州での倭国大乱とその最終大決戦に勝利した天孫族は、東方にある出雲族の拠点をそのままにしておくことは、禍根を残すことになるため、全面降伏させるため軍隊を出した。
  - それが、建御雷神の命が軍船で出かけた、「出雲の国譲り」の話となる。



ナ国と周辺のケニゲニの呪禁



- 弥生時代の開始時期には、先住民の西北九州縄文人と弥生渡来人(倭人)が戦い、弥生渡来人が勝利した。
- 弥生渡来人は水田稲作をベースに北九州から日本全土に拡散し、居住。
  - 板付式土器を使用
- 甕棺の分布から:天孫族は背振り山地の周辺に居住。
  - 天孫族は、当初より、熊本県と鹿児島にも拠点を築いていた。
  - その東方:遠賀川流域とその東の地域には、別グループ(出雲族)が居た。
- 天孫族の王族は、早良平野に居住し、三種の神器と副葬する墓を築いた。
  - 遠賀川流域の出雲族との勢力争いが発生。
  - 一時的に出雲族が早良平野を占拠。出雲族の城ノ越式土器使用
    - 福岡平野の比恵・那珂遺跡を都市計画に沿って、大溝を作る。
  - その後、天孫族が勝利。須玖式土器使用
- その後、福岡平野の南の丘陵地帯に鉄・青銅・ガラスなどの工業地帯を築き、春日・須玖を王域に。
  - 須玖岡本に三種に神器を副葬する王墓。天照大神か。
  - 天忍穗耳命が王位を継承
- 西暦57年:倭の奴国王(天忍穗耳命)が後漢に朝献 金印受領
  - 出雲族が攻勢をかけ、天孫族の王域を脅かす。
  - 長男の天火明命を遠賀川流域に送った。政略結婚・人質?
    - 遠賀川流域の飯塚立岩遺跡の大型甕棺墓に埋葬
  - 次男の邇邇芸命に王権を譲り(三種の神器を渡し)、多くの重臣や主な武将を添えて、新天地へ移動させた。
  - 天忍穗耳命本人と王域の春日・須玖は出雲の手に。(王墓無し)
    - 鉄・青銅・ガラスの工業地帯は、都市計画に沿って再編成。

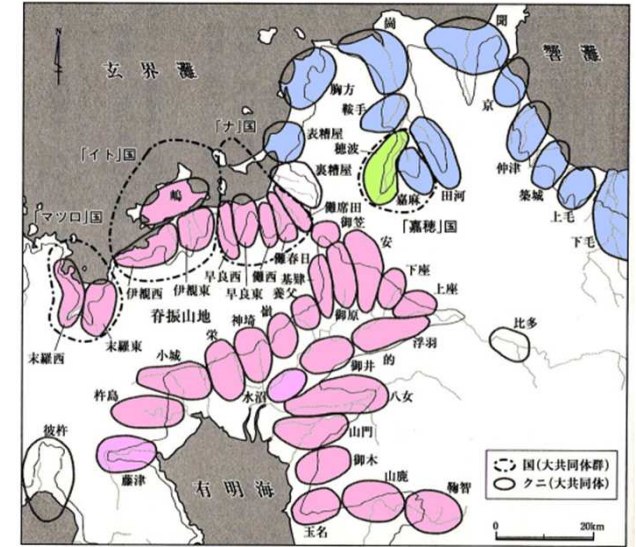
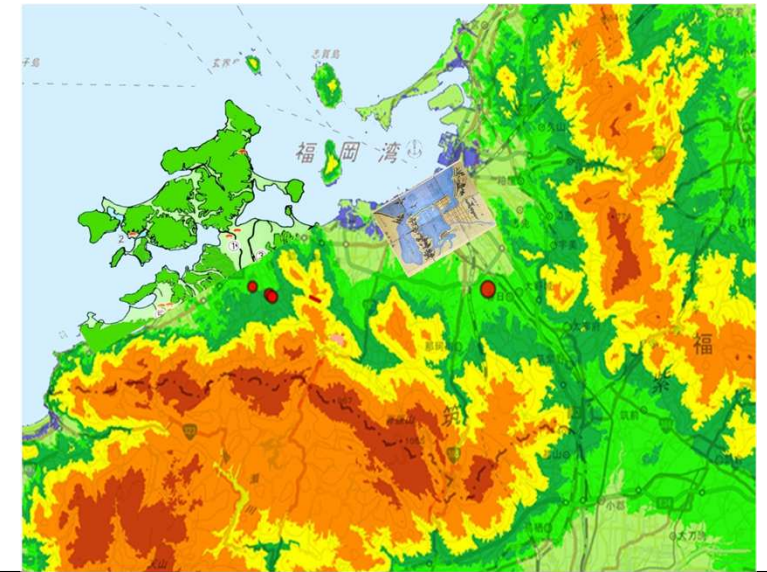
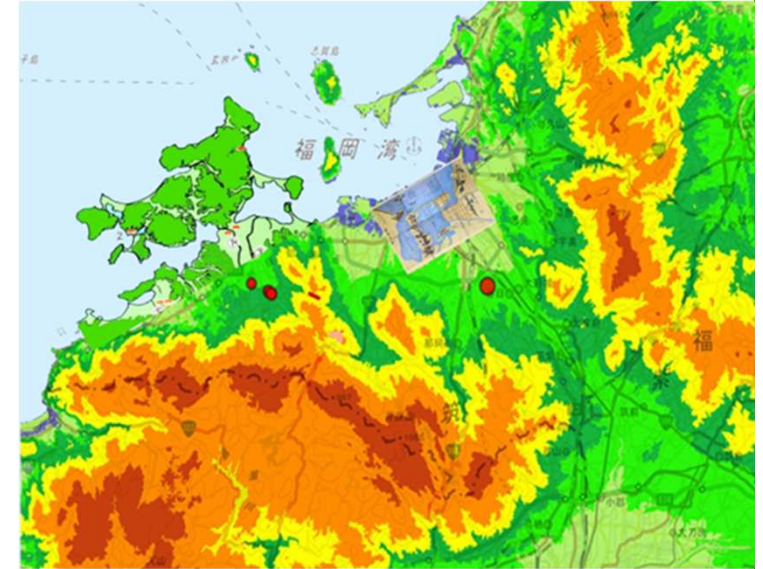


図10 紀元前後の北部九州の部族的国家群(寺沢、2018年より)



- 邇邇芸命一行は、在地の國津神の有志に導かれ、日向峠を越え、前原・糸島地区へ。
  - 弥生時代には、糸島は狭い(細い)陸地で前原地区と繋がっていた。
  - その接続地域の海浜の一つの岬が「吾田の長屋の笠狭碕」
  - 前原・糸島地区は、弥生最古の曲り田遺跡がある水田耕作の可能な地域だが、その後、福岡/早良の発展に取り残された地域。耕作可能な土地があり、水産物が獲れ、豊かな土地。
  - 糸島と前原の間に波静かな湾が有り、鉄鉱石・鉄在が入手可能な朝鮮半島南部地域との航路が開設できることを確認。
  - 吉岐・対馬・朝鮮半島との航路を確保し、交易を実施。  
(「朝鮮半島出土弥生系土器から復元する日韓交渉」 石丸あゆみ著)
    - 須玖式土器を韓半島へ持ち込み、鉄製品を輸入
    - 同伴した工業技術者が活躍し、鉄製品・青銅製品・ガラスの生産が一気に急上昇。鉄製武器を増産し、出雲族との戦いに備えた。
- 西暦107年:倭国王・師升後漢に朝献 生口160人献上
  - 三雲南小路遺跡の王墓は邇邇芸命の王墓と推定
    - 前原・糸島地区の最初の王墓で、その後、300年間、葬祭の儀式が継続した。(残存土器から推定。)
- 邇邇芸命から次の王位継承時に兄弟の騒動が発生。(海幸彦・山幸彦の伝説)
  - 弟の山幸彦:火遠理命が海人族(志賀の島の安曇族)の協力を得て、王位を継承。
  - 兄の海幸彦=火照命が服従を誓い、遠く離れた熊本・菊池地区へ移動。(北九州製の大型甕棺墓に埋葬)
  - 火遠理命の時代には、出雲族との戦いの準備のため、鉄製武器の備蓄と反撃体制の準備を行ったものと推定。



- 火遠理命は、井原鍵溝王墓に埋葬されたと推測。
  - 鵜草葺不合命が王位継承。
  - その当時の天孫族・出雲族の勢力範囲は右図と推定。
  - 飯塚立岩から嘉麻市から南側の秋月・甘木の山越えのルートが有り、その南端に大己貴神社が存在。
    - その南の下座・上座から筑後川の南側の地域には、味耜高彦根神を祀る神社が多い。
    - 連弩用の三角翼鏃の出土が多い。
    - 従って、その地域は出雲方に占領された地域と判断。
- 記紀には、その後大きな戦いの記述は無いが、考古資料では数多く存在。

### • 弥生中期後半以降の北九州の大戦争が勃発。

- 戦争遺跡では、早良・隈・西小田・安・神崎などの天孫族の地域に戦傷遺体が多く、大量の犠牲者を出しながら、**天孫族が勝利**。
- 最大の戦場は、過去の王域の春日・須玖岡本周辺と見る。
- 須玖岡本の王墓/工業地帯には、広形銅矛等の武器型青銅器が大量に埋納。
  - 天孫族側が出雲方の戦争時の旗指物に該当する武器型青銅器を埋納したもの。
  - 戦いに勝った隈・西小田・神崎の天孫族は、武器型青銅器を地元を持ち帰り、勝利したことを故郷に示し、その後、埋納したものと理解する。
- この天孫族と出雲族の大戦争は、暦年に渡り、双方に多大な犠牲を出し、最終的には天孫族が勝った。
  - 出雲側の大將は、味耜高彦根神と推定。この地域に多くの神社を残すが、後世に名を残す神社無し。
  - 天孫族側の大將は、鵜草葺不合命と推定。平原遺跡の王墓に埋葬。
- この大戦争が、魏志倭人伝に記される倭国大乱。
- この大戦争に勝利した天孫族は、北九州だけの勝利とせず、出雲族が支配する日本全土を支配すべく、出雲の国譲りの戦争に乗り出す。

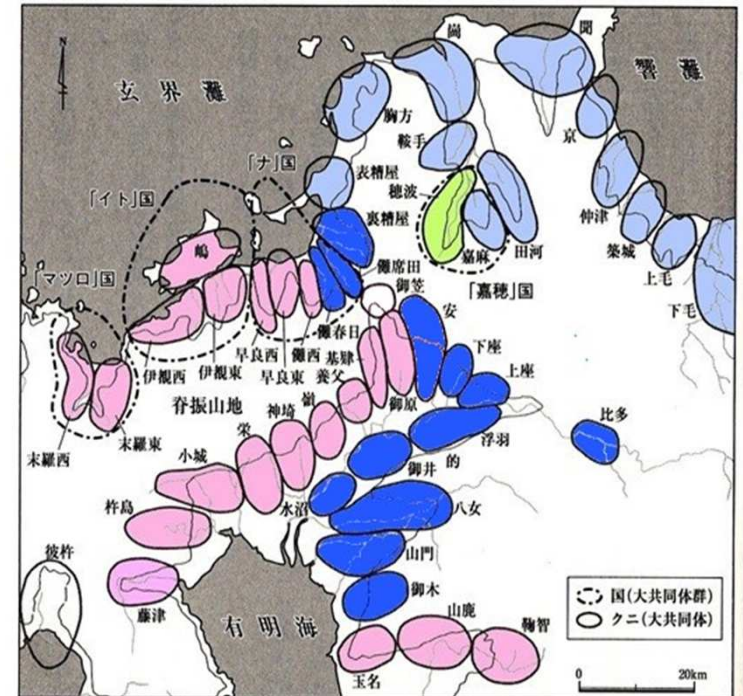


図10 紀元前後の北部九州の部族的国家群（寺沢、2018年より）

青は、出雲方の占領地。

## 神話の解釈と考古資料を対比・統合した年表

- 紀元前3世紀: 弥生渡来人(倭人)が日本に到来。 稲作を始めた先住の西北縄文人と戦い勝つ。
- 水田稲作・金属器をベースとした高度文明を持った倭人が北九州を中心に、日本全土へ拡散。
- その倭人集団の首長となる天孫族は、北九州の早良/春日・須玖/神崎・吉野ヶ里等に居住。
  - 同じ倭人で対立する出雲族は、遠賀川流域から東に居住。
- 紀元前1世紀: 早良平野に天孫族の王墓が出現。 天孫族と出雲族の争いが発生。
  - 出雲族が天孫族の王域などを、一時的に占領。(城ノ越土器が一時的に普及。)
- 紀元1世紀: 須玖岡本に鉄・青銅等の工業地帯ができ、そこが王域となる。
  - 須玖岡本の王墓:天照大神
  - 天忍穗耳命が王位を継承
- 西暦57年:倭人の奴国王(天忍穗耳命)が中国漢に朝献し、金印を受領。
  - 出雲族の攻勢が強まり、
  - 次男の邇邇芸命に王権を譲り(三種の神器を渡し)、王域を見限り、新天地へ送り出す。→天孫降臨
  - 須玖岡本の天孫族王域は、出雲族が占拠。 天忍穗耳命の消息は消える。(金印が志賀の島へ)
  - 邇邇芸命は、前原・糸島地区で、新天地開拓を行い、韓国の鉄を入手し、武器や工業を興伸
- 西暦107年:邇邇芸命は中国漢に朝献
  - 三雲南小路遺跡の王墓に埋葬
  - 火遠理命が王位継承 (兄の火照命が服従を誓い、遠く離れた熊本・菊池地区へ移動)
  - 井原鎚溝王墓に埋葬
  - 鵜草葺不合命が王位を継承
- 西暦220年頃:北九州の大戦争(倭国大乱)が発生。天孫族と出雲族の決戦が行われた。
  - 天孫族が勝利し、その勢いを駆って、出雲国譲りの戦いを実行し、勝利。
  - 平原古墳・王墓に鵜草葺不合命が埋葬される。
  - 全国支配達成のため、神武東征のため、前原・糸島地区から大和に向かって、進攻。
- 西暦238年:九州残存部隊の王の卑弥呼が魏に朝献。

# #1 メールでコメントを頂きました。

- 古事記と日本書紀等をベースとした説明は、推論が含まれているとはいえ、古代史ファンの小生のモヤモヤしていた箇所が整理されました。

- 特にP50の「神話と考古資料を対比し、
- 統合した歴史理解①」～P55「年表」の説明が素晴らしかった。

✓ コメントを頂き有難うございます。

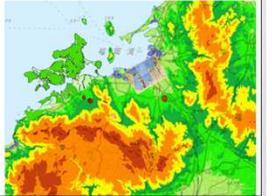
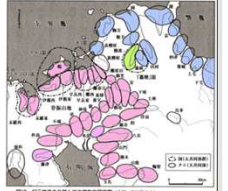
私にとって、天照大神から日向三代の期間が、最大の問題でした。邪馬台国問題は、中国の史書にしか無く、日本の史書には無い。中国の史書を読み解いて、問題を解決しても、日本の歴史と適合しなければ、問題が解決したとは、本当の解決とは云えないと、昔から考えていました。

この期間の「記紀」の記述と合致することが解決になります。

そんな問題でしたので、この際、本格的に記述して、説明しました。材料が乏しい中、どうしても推論が入りますが、記紀に書かれた物語が、全部、考古学で裏打ちできるのは、期待通りでしたが、ここまで、ぴったり合うとは、予想外でした。

50 神話の解釈と考古資料を対比し、統合した歴史理解 ①

- 弥生時代の開始時期には、先住民の西北九州縄文人と弥生渡来人(倭人)が戦い、弥生渡来人が勝利した。
- 弥生渡来人は水田稲作をベースに北九州から日本全土に拡散し、居住。
  - 板付式土器を使用
- 甕棺の分布から:天孫族は背振り山地の周辺に居住。
  - 天孫族は、当初より、熊本県と鹿児島にも拠点を築いていた。
- その東方:遠賀川流域とその東の地域には、別グループ(出雲族)が居た。
- 天孫族の王族は、早良平野に居住し、三種の神器と副葬する墓を築いた。
  - 遠賀川流域の出雲族との勢力争いが発生。
  - 一時的に出雲族が早良平野を占拠。出雲族の城/越式土器使用
    - 福岡平野の比恵・那珂遺跡を都市計画に沿って、大溝を作る。
  - その後、天孫族が勝利。須玖式土器使用
- その後、福岡平野の南の丘陵地帯に鉄・青銅・ガラスなどの工業地帯を築き、春日・須玖を王城に。
  - 須玖岡本に三種に神器を副葬する王墓。天照大神が。
  - 天忍穗耳命が王位を継承
- 西暦57年:倭の奴国王(天忍穗耳命)が後漢に朝献 金印受領
  - 出雲族が攻勢をかけ、天孫族の王域を脅かす。
    - 長男の天火明命を遠賀川流域に送った。政略結婚・人質?
      - 遠賀川流域の飯塚立岩遺跡の大型甕棺墓に埋葬
    - 次男の邇邇芸命に王権を譲り(三種の神器を渡し)、多くの重臣や主な武將を添えて、新天地へ移動させた。
    - 天忍穗耳命本人と王城の春日・須玖は出雲の手に。(王墓無し)
      - 鉄・青銅・ガラスの工業地帯は、都市計画に沿って再編成。



55 神話の解釈と考古資料を対比、統合した年表

- 紀元前3世紀: 弥生渡来人(倭人)が日本に到来。稲作を始めた先住の西北縄文人と戦い勝つ。
- 水田稲作・金属器をベースとした高度文明を持った倭人が北九州を中心に、日本全土へ拡散。
- その倭人集団の首長となる天孫族は、北九州の早良/春日・須玖/神崎・吉野ヶ里等に居住。
  - 同じ倭人で対立する出雲族は、遠賀川流域から東に居住。
- 紀元前1世紀: 早良平野に天孫族の王墓が出現。天孫族と出雲族の争いが発生。
  - 出雲族が天孫族の王域などを、一時的に占領。(城ノ越式土器が一時的に普及。)
- 紀元1世紀: 須玖岡本に鉄・青銅等の工業地帯ができ、そこが王域となる。
  - 須玖岡本の王墓:天照大神
  - 天忍穗耳命が王位を継承
- 西暦57年: 倭人の奴国王(天忍穗耳命)が中国漢に朝献し、金印を受領。
  - 出雲族の攻勢が強まり、
  - 次男の邇邇芸命に王権を譲り(三種の神器を渡し)、王域を見限り、新天地へ送り出す。→天孫降臨
  - 須玖岡本の天孫族王域は、出雲族が占拠。天忍穗耳命の消息は消える。(金印が志賀の島へ)
  - 邇邇芸命は、前原・糸島地区で、新天地開拓を行い、韓国の鉄を入手し、武器や工業を興行
- 西暦107年:邇邇芸命は中国漢に朝献
  - 三雲南小路遺跡の王墓に埋葬
  - 火遠理命が王位継承 (兄の火照命が服従を誓い、遠く離れた熊本・菊池地区へ移動)
  - 井原鏡満王墓に埋葬
  - 鶴草葦不合命が王位を継承
- 西暦220年頃:北九州の大戦争(倭国大乱)が発生。天孫族と出雲族の決戦が行われた。
  - 天孫族が勝利し、その勢いを駆って、出雲国譲りの戦いを実行し、勝利。
  - 平原古墳・王墓に鶴草葦不合命が埋葬される。
  - 全国支配達成のため、神武東征のため、前原・糸島地区から大和に向かって、進攻。
- 西暦238年:九州残存部隊の王の卑弥呼が魏に朝献。

- 記紀の記述から古代史を復元し、考古学で裏付けるという本会の目的どおりの報告で素晴らしいと思いました。いくつか確認点があります。

1

出雲族と天孫族が争い、出雲族が一旦勝利しています。可児も同意見で昨年11月に同じように報告したところ、鉄の産出量の観点から、出雲族は天孫族に勝てないという意見が会員からありましたが、そこはどうでしょうか？

鉄の出土量から、出雲族が勝てないとの意見

これは、11月にも説明したと思いますが、北九州内の2勢力の地域割りに関連します。

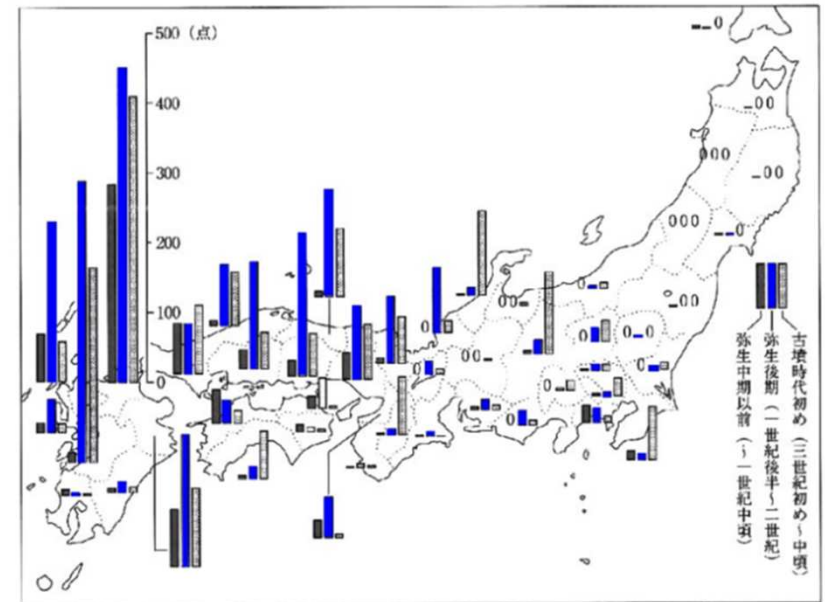
勝てない説の方は、北九州全域＝天孫族、中国地方以東が出雲族と見ている。

北九州内での地域割りは、天孫族は博多・福岡平野以西、出雲族は、遠賀川以東と推定。

この地域割りで検討した結果は下記。

第12回出雲勢力の丸地基本レポート46・47頁では、

鉄の出土量は、天孫族と出雲族：鉄製品の所有量は互角か、出雲がやや多い。



第11図 県別鉄器出土量 (寺沢 2009)

# 鉄の器具・武器

- 鉄の武器は、天孫族と出雲族が入り乱れて戦った北九州に多い。
- 全国レベルで見ると、出雲族が進出した丹後・北陸・関東と瀬戸内沿岸に多い。
- 天孫族と出雲族：鉄製品の所有量は互角か、出雲がやや多い。
- 右図は「研究史からみた弥生時代の鉄器文化」野島永著 より、彩色丸地

工具・農具

武器

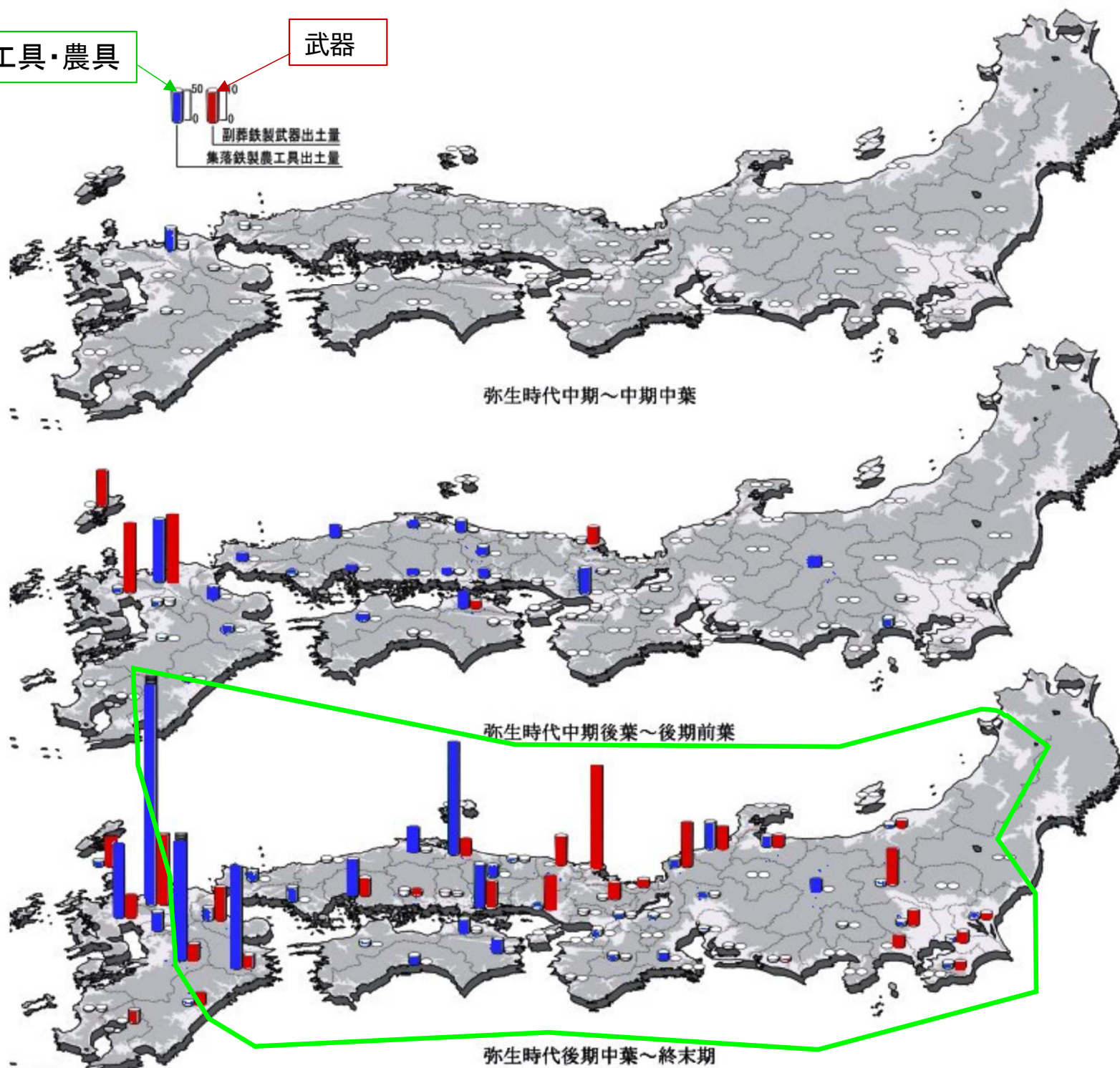
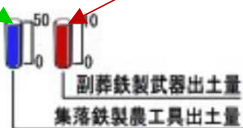


図 5.5 弥生時代の鉄器出土量

## ・ 2 倭国大乱から年代想定

戦争はアマテラスからオシホミミ、ニニギ、ホデリ(ヒコホホデミ)、ウガヤまで5代にわたり、100年以上と思われる。一方、倭国大乱は「暦年続いた」とあり、10年くらい？そうなると倭国大乱は、ウガヤ(天孫)とアジスキタカヒコネ(出雲)の争いを差すこととなる？

そうなると、ウガヤは2世紀末の人物となる。遡ると(1代25年とみなす)、アマテラスの1世紀中盤となる。ニニギの天孫降臨(イト国への脱出)は、2世紀初頭となる。

丸地さんレジュメ(30頁)で、イト国が栄えだしたのは、弥生中期とあります。弥生中期は42頁では、紀元前2世紀から1世紀前半となっており、ニニギの天孫降臨の時期よりかなり遡ります。

同じように須玖岡本遺跡が栄えたのは紀元前であり、アマテラスの時代と大きく遡るようにおもいます。

---

## 2. 年代想定の件

・考古史料の年代は、今の状態では、かなり曖昧です。相対的な年代は可能です。

記紀は年代を特定できる情報は少ない。相対的なものしかない。

・中国史書に年代が記されたものは、年月が特定可能です。

但し、年代が推定されたものは、要注意です。

倭国大乱の年代は、倭人伝では、不明確。後漢書で年代幅が推定され、梁書では、狭い範囲に特定。但し、根拠は無く、勝手な推定。

倭国大乱の年代を2世紀末とするのは、根拠のない後漢書・梁書で信頼できない。

・



- 今回の推定は、年代観が不安定な考古史料を使い、相対年代観を複合して、事件・事象を咬み合わせた。従って、考古史料に示されている年代と、直接的に対応関係を比べると、大きな誤差が生じることが出る。今後、行わなければならない作業は、今回の作業から得られた年表＝資料55頁の精度を上げること。その年表には、中国史書の年単位の正確な年代が入っている。その年表に沿って、考古資料の年代の修正作業を行うこと。
  - 1世代についての考え方は、世界史などでは、1世代25年を使っていると聞く。古代天皇の平均在位年数は、11年と推定しています。今回の天照大神以降の5代では、25年を大幅に越え、50年位になる筈です。50年が正しいのか、代数が間違っているのか、など検討が必要と考えます。天孫族の代数と出雲族の代数では大きな差があり、天孫族の系図では、何世代分かが失われて可能性が有ります。
- 年代想定に関しては、丸地の今の考えは、55頁の年表です。
- 但し、この質問で見直した処、修正が必要と思う箇所が出てきました。
- 須玖岡本に、テクノポリスが形成された時期は、紀元前1世紀。
- 王域ができたのは紀元元年に近い前1世紀。
- 西暦5年に中国「新」に朝献したのは、天照大神。埋葬されたのは紀元1世紀。
- その外は、大丈夫と思っています。

3 イト国は日向峠を越えたくらいの距離感ですが、出雲族は攻めてこなかったのでしょうか？素朴な疑問です

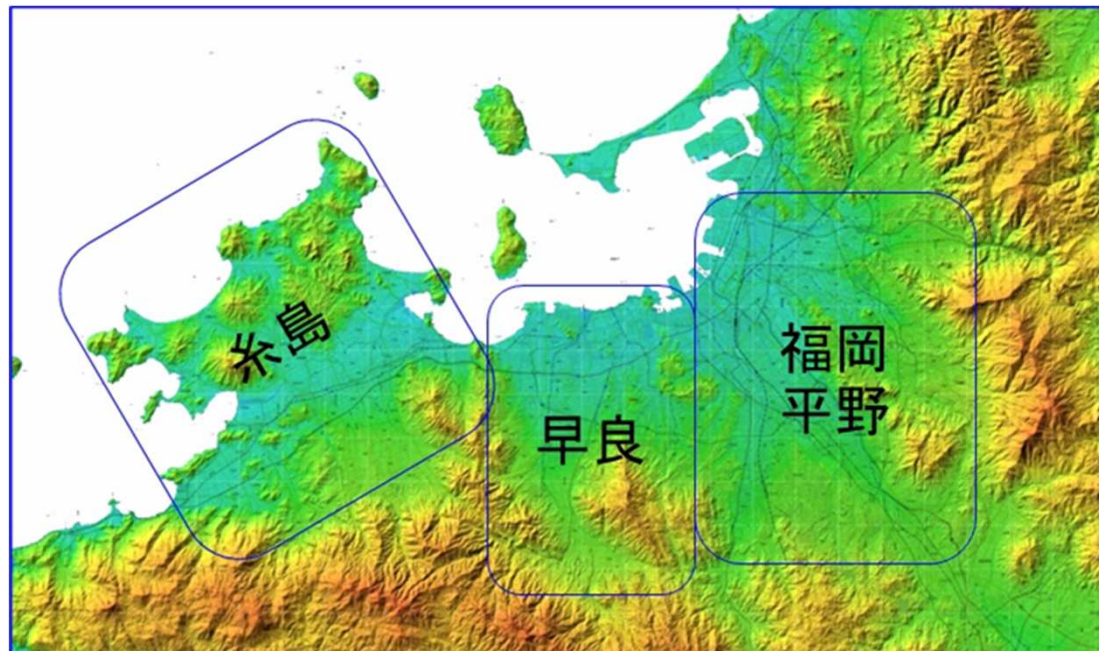
-----  
この件、出雲族は攻めたと思います。地形を見ると、

前原/糸島地区・標高100m程の連山・糸島平野・標高50m程の連山・福岡平野  
弥生時代の福岡平野と早良平野の境の地域は、現在の地形と比べると複雑です。

平安末期の博多港の地図の草香江の西側が早良との境。

藤尾糸島地区地図の右側/東側が早良と博多側の境。水色の部分は標高が低く、海だった可能性が高いとのこと。

福岡平野側から攻める場合は、海岸側から行く場合には、草香江の海を越え、その西側は低湿地が続き、島と山が有る地形。



#2 質問/確認 ③-2



- 前原/糸島地区が守りきれた理由は、早良平野の天孫族が頑張ったからだと考えています。
- 早良平野の西側はこの遺跡は継続的に残りましたが、東側の集落・遺跡が途中から減少しています。
- 一時的に、出雲族から攻められ占領されてことは有りましたが、その後は持ち直し、守り通したと見ます。
- 西側の地区の広い墓域がずっと継続していますので、そう考えます。
- 早良平野の東側を守るのは、甚大な被害を受けながらの守備だったはずで。
- 師升の生口160人の多さは、出雲方が繰り返し攻めて来た時の捕虜の数と見ます。

-----

地図を見直してみました。

この地形ですと、攻めるなら山越えではなく、船で海からの方が良いように思います。

山越えで攻められた方が守りやすそうに感じました。

ありがとうございます。

絶対年代	473 BC	400 BC	300 BC	219 BC	212 BC	100 BC	5年	57年	107年	200年	240年	248年	266年								
中国史書上の日本関連	呉の滅亡(春秋)			徐福船団出航	船団出航 徐福第二次		東夷王朝献「新」に	金印を賜う 後漢光武帝	後漢に朝献 倭国の帥升が	倭国乱	卑弥呼に送る 魏が使者を	卑弥呼死去	晋へ使節派遣								
日本全体	糸島	九州の菜畑曲田板付で第一次水田耕作開始	支石墓が唐津糸島半島など北九州に広まる	日本全土(青森を含む)に第二次水田耕作開始	山口県土井ヶ浜 望郷の戦争遺跡	戦争遺跡 支石墓に甕棺埋葬	4代の別天津神と天神七代	天照と須佐之男命 誓約	須佐之男命 高天原で狼藉	天岩戸 神話	青銅器/ガラス工場群	須玖本墓	天孫降臨	海幸彦山幸彦 天孫族神話	糸島・前原に天孫族の中心が移動 青銅/鉄の生産が急増	福岡平野の天孫族の繁栄は消滅 博多平野は出雲方へ 区画整理された集落に	北九州の大戦乱	出雲の国譲り	邪馬台国	神武東征	大和朝廷成立
	福岡平野																				
	遠賀川																				
	出雲																				
	畿内																				
米品種	初期 短粒米			「短粒米」が消滅し、「やや長粒米」が北九州を含む日本全土に拡散																	
高地性戦争遺跡								高地性集落遺跡 1期			高地性集落遺跡 2期			戦傷遺跡 3期							
青銅器								青銅製武器/銅鐸→祭器							埋納						
神器	三種の神器などの墳墓へ副葬																				